

の教理の採用の場合には、必ず、釋尊の思想にまで翻譯されて、取りこまれてゐるのであつて、むろん、釋尊自身の生命論理とは、びつたりと必然的な形に於て、消化されてゐる。けれども、今の場合は些しの翻譯も、少しの消化も受けないでゐる。しかも、菩提道場で、一切衆生の生命の權威を解放された、あのお心持から眺めて見ても、また、最初に起つた宣傳意志に照しても、どうしても、婦人だけが救済に漏れる筈がない。さうだ、既にお證りになつて間もない頃に、耶舎といふ男の母親が、在家のお弟子になつて救はれたと、聞いても確かに居る筈だ。どうして、女だけが捨てられよう——では何だらう。單に世間道德に従ふためか？ そんな筈もむろんない。在家にあつて、世間の道德や法律に、従はねばならぬものにこそ、世間道德や社會制裁の權威もあらうが、家を棄て、名利を捨てた出家の上に、何で左様なものに權威があらう。さうだ、世間に於て、あの嚴格な嚴格なそれこそ男尊女卑の程度ぐらゐでない、かの四姓の階級でさへも、理髮師の優波

離(梵: Dhipi)の出家によつて、破られてしまつてをるではないか——

ここまで考へて來た時に、阿難の記憶は、ある在家の無智な信者が話した夢物語を、ふと思ひ起した——場所は確か靈鷲山のやうでもあつたが、また忉利天のやうにも思はれました。巍峨として聳ゆる靈山の中腹に、天宮のやうな講堂があつて、光を孕んだ雲が、その臺の上を流れてゐました。講堂の周圍は、立派な苑林で、池には惱を溶かすやうな水が溢れ、樹々には歡びそのものが脱け出たやうに、鳥の音が聞えてゐました。私はあまりの不思議さに、寧ろ恐れを擁いて、遁げ出さうかと思つてゐました。するとその時、突然麓の方から、鯨波のやうに大せいの人聲が、山を割つて響いて來ました。と一しように、山のはるかな嶺からも、落雷のやうに迫る雜音が、鼓膜をついて鳴つて來ました。はつとその時、胸に浮んで來ましたのは、阿修羅(巴: Asura)と帝釋天の戰爭の話です。はてこゝは三十三天の喜見城であつたのか、それにしても恐ろしい時に出會つたものだ——

私は夢ながらそんなことを思つてゐました。けれども、その豫測は、すぐに破れてしまはれました。耳をすますと、阿修羅の鯨波と思つた麓の叫びは、間違ひもない人間の聲で、しかもそれは、大せいの人たちが、世尊の御出世を歡呼する、くるほしい歡びの歌でした。また、帝釋天の軍鼓の轟きと思つたは、天人たちが佛陀の御徳を讚美する、幽しい樂の音だと知れました。そしてもうその時は、天人たちも、人間たちも、綺羅のやうに講堂のほとりへ、集まられてをりました。姿をかへた驚きと歡びは、ひつきりなしに私の胸に襲つて來ました——そのうちに、大せいの群衆が、一やうに私のゐることを發見して、おゝ君も來てゐたのか、何でそんなところに屈んでゐるのだ、といつて、しきりに私を招くのです。けれども、私の怯氣は極度に達してゐて、どうにも腰が立たないのです。すると群衆の一人が、つか／＼と私の側へ驅けて來て、どうしたのか、どこか具合が悪いのか、手を持たう、さういつて私の手をば確乎しめました。私はあまりの親切さに

嬉しくて、はい有難うございますと御禮をいつて、ひよつとその顔を見あげるとこれはしたり、私の國の王さまなのです。私は思はず「まあ勿體ない」と叫んで、土下座に伏しようとしたが、親切な王様は、さうです、あの親切は今でも身に沁みえます——茲は佛陀さまのお前だ、遠慮はいらぬ、お互に佛陀様のお前では同じ子供だ、兄弟だ、さあ行かうといつて、どうしても手を放されないのです。しかし、あまりに私の躊躇いであるのをお知りになると、今度は、群衆の中から二三人の人を呼びよせられて、この男を、皆んなで抱いて往かうと仰しやるのです。私は、またその時驚きました。その一人は私の近所で有名な長者ですし、一人はこれまた名だての泥棒なのです。今一人は、もと外道の師匠であつた筈の家です。しかもこの毛色の變つた四人の人が、おい君々なんかと云つて、まるきり友だちか兄弟のやうにしてゐるのです……群衆の中に伴れて行かれると、そこでも亦非常に驚いたのは、私たちが今日まで無上の神さまだと思つてゐました、

帝釋(Ā. Sakko devānam indo)をまや梵天(Ā. Brahmā)をままでが、大せいの天人を引きつれておいでになつて、しかも、我々人間どもと同じいやうに、交つてゐられるのです。間もなく、講堂の扉がすうとあくとき、中にはあの崇高い世尊さまのお姿が、ゆつたりと山のやうに浮み出ました。一同は思はず頭を下げると、今度は世尊さまのお神容から、すがすがしい光明が、泉の如くに涌き立ちました。すると、今まで艶々しく光つてをつた、帝釋さまなどのおからだは、だん／＼に光を薄めて行くと思えたのですが、その中に世尊さまのお光は、次第に群衆の中へ迫つて來ました。そして不思議なことには、そのお光は日や月とは違つて、我々のからだにまでも沁み込んでくるやうに、思へるのです。かと思ふと、今度はみんなは夢心地に軽い氣分に誘はれて行つて、すべての惱ましいものがなくなりました。その中に、沁みこんだと思つたお光が、私たちのからだを、まるきり玻璃のやうに透きかへしました。そして、山も空も、地も草も水も木も、すべて

のものが光のやうに一になつて、溶けたと思ふと、はつと不思議な夢から醒めました……私はその時から世尊さまを、因陀羅さまよりも、帝釋さまよりも、もつと／＼偉いお方だと、信じることが出來ました——

眼に一丁字のない無智なものゝ瞳にも、世尊は天界の諸王にも勝る天中の天として、映つてゐるのだ。さう思ふと、阿難の胸は張り裂けさうに、尊い涙で充されて來た。

無智な人から思念さるゝ佛陀。それは、かの帝釋や梵天などゝ、同じいもの考へらるゝ、偶像に近い質が含まれてゐた。帝釋や梵天。それは直ちに民族的傳統の表象であつて、また釋尊の成道によつて破壊された、大きなものゝ一つである。嘗つて熾烈な求道欲に、燃え立つてゐられた釋尊の、み心は、すべての傳統教學から望を斷られた。人々は諸天の前には、奴隸のやうに奉仕する、或る者は殘忍な供犠を敢てし、或る者は火のやうな苦行に忍んで、ひたすらに神の心を迎

へようとする。その心持はよく解る。けれども、天そのものの本質は、「かういふ風にありたいものだ」といふ人間の欲望と、その欲望を破壊する「外部からの恐ろしい力」への幻惑が、二者結びついて出来た偶像である。いはゞ、欲望の権化であつて、また避難所でもある。欲望の権化であるゆゑ、その境界が華やかであればあるほど、猶ほ次の欣求を持つ筈だ。欲望の避難所であるから、また假の宿として凋落の時を豫想される。それは釋尊のやうに、地上の歡樂を嘗めつくいた經驗と、深刻な生命批判の天賦を備へた頭惱には、あまりにも愚かしい希求である、すぐに見透いた。苦も幸も外からは來ず、すべては内より芽生ゆ——釋尊の求道がこゝへ辿りつき、まづ自らの苦惱の現前相を凝視めたまうて、苦惱の本を渴愛(E. Tanha 欲望)にあり、人眞に幸福を求めば渴愛をつくせよと叫ばれたのは、まことにこゝの徹鑿に由來してゐる。かくて永い傳統の間に育まれて來た、「生命を脅威し、亦救済する外部の力」は、盡く釋尊の證悟によつて、破壊しをへ

られた。今や道を成じたまうた菩提樹下の凜然たる釋尊。そのみ足のもとには、永い間傳統の宮殿に君臨して、民族の生命を握つて居つた暴君(諸天)が、あはれや一個の木偶と變じて、手を断ち足を毀つて、悲惨な骸を横たへてゐる——しかし、さうした深いけじめが、釋尊と諸天の間にあるものだとは、むろん無智な人には解り得ない。彼等に於ては、寧ろ暢妙な説法とか、圓滿な相好とかいふ外部のすぐれたものに、釋尊の偉大が直覺された。またさうすることが却つて、帝釋や梵天に慣れきつてゐた傳統の頭惱に、佛陀の宗教を受け入れる、くせのない樂な方法でもあつたのだし、またそれだけ、釋尊に對する信仰は、單純で理窟がなかつた。教を蒙る師といふよりも、欣求を持ちこむ本尊に對するといつたのが、またそれだけに絶對の君臨を仰ぐといつたが、彼等の、釋尊に對する態度であつた——かうした無智なものゝ信仰は、すぐ愚かなものに智者から見える。阿難も嘗ては、齒痒ゆいやうな、また無理もない氣の毒なことにも、思つてをつた。し

かし、今日はどうしたもののか、それが至つて尊いものに、またほれなくしいものに慕はれた。さかしらな智は、ともすれば影のやうに疑をひく——思索の道に深迷ひして、いつの間にか釋尊と傳統の力とをあまりに考へすぎてゐた自己を、うら恥かしくまた呪はしくすら、阿難は思つた。釋尊に對して、絶對の信順を捧げてをつた彼として、たとへ卯の毛ほどでも、その信順に裏切ることは、たまらなく苦しいことだつた。今もあやういところを、愚かな夢物語で救はれたので、彼は飛びつきたいやうな感謝と懐しみを、夢の老翁に持つのであつた。またさうした心持の中からは、傳統の壓力で、女人の出家を阻むといつた馬鹿げたことが、あり得る筈がないといふ歡びも、一ばい力強く涌いて來た。

しかし彼の心は、その時もう昂奮はせなかつた。彼は寧ろ、靜かな心を欣つてをつた。「さうだかういふ時には、ひたすらに世尊の正智を念じよう——そんな氣がしきりに起つた。で立つて、禪定に入る都合のいふところを、あちこちと探

いた。

日はもうとつづくに、中天へ届いてゐるので、さすがに濃やかな密林も、斑點のやうな晷ひかげを到るところに撒いてゐた。鳥もせつせと稼いでをつた。森の中にも、可なり忙しいけはいが迫つて來てゐる。

阿難はやうやく、或る大樹の下で、地苔さへない淨い地を見つけ出して、そこへ座具もなしに坐りこんで、禪定ぜんぢやうにいるすがたを取つた。兩手の掌をかろく合せて結跏趺座といふ形に据ゑた膝の上へ、しなりと垂れる。胸をやゝ押へる程度で猫背になつて、臍のあたりで、うんと息を籠め、それから首を、自然に据ゑて、眼を半眼の心持に閉ぢる。それが最初のしなで、次は呼吸を調へる。ひと一つ、ふた一つ、み一つ、息が次第に殺されて行くと、今度は、毛孔が一度に呼吸するやうな、熱しきつた壓力が、全身の血を沸騰させる。すると、耳が早鐘のやうに鳴つて、意識は湯氣の如くばいつとする、肉體のけじめがとれて、外と内とが一

つになつた、おぼろげな気分である。その中に大地のたましひが、溶けこむやうに、尾骨から背筋を通つて、腦の中心へ、すうと氣持よく流れこむ。それと一しよに、全身の神経が、盡く脊髓の中心へ集注して來て、引締つたひやう／＼しい氣分に一轉される。その時はもう、意識は針の如く、細く鋭く單純になつてゐて、雜念といふものがすべてなくなる。もとより、内と外との感じもないし、耳の早鳴も静まつてゐる。たゞ腦だけが鏡のやうに澄みきつて、求むるものゝ真相を、影のやうに映し出す。いはば宇宙も肉體も、溶けてしまつてただ一つ、心の活き——意識だけがその中で自由に泳ぐ、といつた心持である。

阿難は入定の前に、何事を求めてゐたか——それは直ちに定の鏡に透寫される素材であり、また、取り残された唯一つの活きである。彼の入定前に思念してゐたものは、波闍波提夫人と耶輸陀羅妃の運命であつた。またその運命の髻を、擱んで居られる釋尊の、お心持に外ならなかつた。彼はそれを、情實の方面からも

考慮した。また論理の上からも討究した。けれども、いづれの場合でも、女人の出家が拒まれる、積極的理由といふものが、見出だせなかつた。彼は思索の上では、正しく勝利者になつてゐた。いつ何ん時釋尊へ、二人の出家を願つて出ても、いとといふやうな自信すら、出來てゐた。しかしそこに何とはなしに氣の怯くものは、さうした思索の間にも、いつとはなし、釋尊の正覺から遠のいて行くやうな、氣持であつた。しかもこの氣持は、信順な彼として、一ばん惱しいものだつた。「さうだ、自分は世尊から離れよう／＼としてをつた、しかし、それは最も危険なことだつた」——最後にこんな氣分に誘はれて、釋尊の正見を念すべく、禪定に入つたのであつた。だから、今の禪定は、世尊の念じたまふ對婦人の如來心へ直參すること、たゞそれだけが使命であつた。

彼の定鏡に映らうた、最初のもの、實に釋尊の降魔であつた。

道將に成せんとして端然と跏趺したまふ釋尊。そのみ胸にはあらゆる物慾が、

夜叉のやうに狂ひ立つた。それは正しく、人類の苦の根を物慾にありと覺知して、その慾の絆を断たうとせらるゝ、人間釋迦の、最後の苦闘であつたのである。

物慾は、直ちに姿を、悪魔と變へた。「太子悉達多は今少しのことで、證悟の世界に入らうとしてゐる。太子の成道は、我々物慾の世界に取つて、げに恐しい破壊の刃だ。行者共。行つて太子の、正覺の頸を取るまでは、一步も退くな、死すとも歸るな」——恐ろしい下知が、その魔王の口から奔しつた。忽ち八萬四千(佛敎でいふ憐みの數)の軍勢は、獅子奮迅の勢で、太子の周圍へ押しよせた。利財の軍、名譽の軍、權威の軍、戲論の軍、惡口の軍、傳統の軍、それらは外部から、汐のやうに攻め立てた。僞慢の軍、取著の軍、睡眠の軍、怠惰の軍、愚痴の軍、瞋恚の軍、それらは内部から、油を注いで燃え立つた。否定するものと肯定するもの、聽るさうとするものと、聽るすまいとするもの。二つの心は、火花を散らして互に打ちあつた。劍戟の閃きと、怒號の轟き、さては烟焰天に燃えつき、狂風地に卷

き立つやうな激戦が、しばし太子の胸を味くした。

けれども、太子に於ては、既に六年間の苦行によつて、この悪魔を降伏すべく、充分な戦備が出来てゐた。「若し道成らずんば死すとも立たじ」——鐵壁のやうな意志が、眉宇の間に張りつめてゐて、犍猛な悪魔の襲撃も、さすがにその毛一筋さへを、動かされるものでは、あり得なかつた。「菩薩に勝利と光榮とあれ、悪魔に恥辱と敗亡とあれ」——忽ちどこからともなく、成道の祝ぎが歌はれ出すと、今までたゞの人間であつた太子から、さんらんとして光明が射出された。と一しよに、「おゝとうとう、我等の棲家は破られたのだ」といふ、最後の悲鳴を擧げて、光に睨まれた暗の如くに、悪魔の群は姿を隠した。

悪魔が退散すると、太子の心は、苦もなく熱もなく、玲瓏と玉のやうに澄んでゐた。しかしその時、またもや執拗な悪魔の影が、惱しいすがたを以て映らうて來た。今度は、さつきの猛々しい相貌に、うつてかはつて、可なり深刻な魅力を

持つた、三人の女性であつた。それらは、慾妃(Tanha)、愛妃(Arati)、染妃(Rati)といつて、魔王にとつて最も可愛い娘であつた。最初魔王等が、戦ひに臨んだ時は、女性の事として、魔の宮殿深くへ秘れてゐたが、父王等の敗北を見て、最後の手段として出かけようと、決意した。魔王はその甲斐ないことを、知つてゐたから、娘たちの孝心を、喜びながらも、猶ほいろ／＼と慰めた。しかし娘たちは、「お父さま、御心配遊ばすな、妾たちには、男の魔軍たちよりもすつと／＼、強いものをば備へてゐます。男たちが攻めた太子の弱點は、すぐにも塞げる、ほんの上面の穴でしたけど、妾たちの攻める弱點は、太子が命とたのむ大事なものです。御心配遊ばすな、きつと、今日まで幾百千の堅い意志の男を、誑らかせて来たこの腕で、見事に太子を、もとの慾の世界へ引入れて、御見せ申しませうに」と、きつい自信を以て出かけることに、無理に迫つた。で魔王も、餘儀なくそれを、許すことにしたのであつた。

一ばん姉の慾妃は、惱ましい肉づきの、年増になつた。次の愛妃は、血をそゝるやうな花嫁に、末の染妃は、うら恥かしい娘となつた。そして互に、我ながら見惚れるやうな肉の香で、やがて太子を捉へるのだと、思はずにつこり笑むのであつた。

間もなく太子の心鏡に、なやましい影があり／＼と、壓するやうに映り出た。

「譽ある御出家さま、妾らは御身を慕うてこれへまで、參つたものにござりませう。どうぞ、朝夕、お側でお給仕の出來ますよう、ひとへに願ひいたします」

魔女の聲は、媚そのものゝやうに震へて迫つた。しかし、もう昔の太子でなかつた釋尊は、それすら耳に入らぬ如くに、禪三昧に入つてをられた。「きつと、燃ゆるやうな狂ほしいものが、太子の胸からわき立たう」——さう豫期してをつた魔女にとつては、それはあまりに意外な驚異であつた。いな、釋尊自身にとつてすら、この惱ましいものを平氣で過せる證悟の力は、思ひがけない偉大であつた。

優しいものと、柔かいものとを素材に用ひた、第一回の魔女の試練は、みごとに失敗つた。やゝ瞋氣だつた彼女らは、次に思ひきつた態度を取つて、直覺的な幻惑を、太子の胸に、巻き起さうと計畫んだ。それは、太刀や槍などの道具を捨て、ただ肉の力だけで勝負する、武士の組打のやうに、最後の必死に外ならぬ。忽ち三個の肉塊が、すべての裝飾を取り去つて、醜しいもの、惱しいもの、血をそゝるものゝありだけを、釋尊のみ前にさらけ出した。そして魅力の限りを佛陀の胸へ投げかけた。

けれども、この努力は佛陀にとつて、却つて好個の研究材料にしか、値ひせなかつた——頭上髪ありたゞこれ毛のみ、象馬の尾毛と何ぞ簡ばん。髪下髑髏ありたゞこれ骨のみ、屠家に積まるゝ猪骨に同じ。頭中腦あり泥の如く腥し。鼻高く眼澄み、口爽やかなれど、すべてこれ涕唾の器のみ、腹、肺、腸、胃、肝、腎、膀胱、みなこれ何の愛するところぞ。腐臭堪へがたく屎尿充つ。たゞこれ一個の

韓囊のみ。四肢手足骨々連り、筋と肉と其のあひに附着す——慾も断たれ愛もつき、色つやもなきたゞ一個の肉塊としか、その御目には見えぬのである。

さすがの魔女も、もう狂はしく力がつきた。猛然と最後の姪力を、佛陀の肉體に訴へようと、一人は胸へ抱きついた、一人は口へ接吻を注げた、残る一人は、思ひきつた肉の要求を、火のやうに迫つていつた。しかし、それも駄目だつた。松吹く風か、夜照る星か、ただ徒らに佛陀の前を、一閃一過とすぎさるだけのことだつた。

次で阿難の定鏡へ、映つて來たのは、王宮生活の釋尊だつた。それは正しく、かの悪魔との奮闘を、内がはから、意義づけるものだつた。かくの如き經驗あればこそ、かくの如き精神生活産み出さる、といふ因果の必然性に照すと、降魔は表で、これは裏である——フキルムは、過去のすがたを逆に展開してゆく。

その始めは、太子が出家せられようとする夜の、「恩愛の巻」であつた。

「せめて、一と眼だけなと、妃や王子に會つて行きたい(扉に手をかけて、しばし賭ふ)いや、よそう! (聲は低い、しかし強い決意を、眼にまで見せて、扉からつと手を離す) さうだ。會つたらきつと、また恩愛に敗けるのだ。今日までだつて(胸のあたりで指折り數へる) 出家の決意を、何度したらう。そのたんびに、破れてしまつたのは、皆んな恩愛のためだつた。(しばし手を胸にしたまゝ沈黙、そのさしうつむいた瞳には過去の夢路が、恐ろしい憎悪となつて、映り出てゐる氣持を、別出の臺本によつて、こゝへ挿挿む、その映畫終つて) おゝ、畏しいことだ。淺間しいことだ。これだけに虐待されてをりながら、まだ俺は恩愛の、虎穴を覗うて迷つてゐるのだ。これではいけない。しつかりしよう……さうだ會ひたいならば、^{ぼとけ} 佛陀になつて會へばいいのだ。往かう。往かう。會はずに行かう。(二三歩出かける、しかしすぐ、彈仕掛のやうに、扉の方へ引着けられる) 苦しい、苦しい、一たいどうしたら、いふといふのだ。(胸をむしるやうにして聞える) さうだ、いつそ會つ

て出かけよう。一と眼でいふのだ。寢姿で結構だ。ひよつとしたら、もう會ふことが出来ないんだもの……今生の別れた、たつた一と眼」

(思ひ入つた心持で、扉を開ける。そこは妃の居間に通ずる途中の、侍女たちの寢室である。あまた寝ねたる侍女たちは、艶姿紅粉の晝の緊張にひきかへて、これは又、眼もあてられぬ醜態で寢入つてる。或者は半身を露はして醜きものを示し、或者は^{まぶた} 臉を閉ぢずに、或者は口を開いて泡を吹き、或者は夜具をはねのけ手足を展べて、大の字の形に仰臥してゐる。或者は脚の間に手を挟み、或は隣の者の頸へ腰をさしあて、或は隣人の片足をかい抱き、或者は齒ぎりをかみ、或者は雷のやうにいびきし、其の他大小便利を失する者など、實に眼もあてられぬ態である——太子これを見て飛び立つやうに悸き忽ち扉を閉ぢる)

「何といふ恐ろしい態だらう。まるきり掘りかへされた墓場のやうだ。こんな

ものに、どこに執着すべきたねがあらう。おと、畏ろしいものは恩愛だ。異性への執着だ。もう俺は遁げよう。一時も早く、恩愛の穽から遁げ出さう。

(思ひ入り深く消ゆるやうに姿をかくす)

(次、別出臺本前に「みんな恩愛のためだつた」といつて、過去を反省するところへ、挿込む映畫)

(先づ、淨飯王が太子の出家を讎へすために建てた、三時殿の景。そこでは、三季の草花の植込み、水の流れ、築山の風情など、それごとく春夏冬の三季に、ふさはしく建てられた三棟の殿舎へ、うつらふやうに配置されてゐる。その庭園で太子が、百千の侍女に取り圍まれて、この世の歡樂を盡して居られる。けれども、何故か太子の胸には、充されないものがあるらしく、しきりに考へこんでをられる。侍従の優陀夷(Udayin)は、これを非常に氣にして、太子を無理にすゝめて、王家の離宮、勝妙殿へと、一行を誘ふ。そこでは、優陀

夷が宮女たちを督して、或は舞はしめ、歌はしめ、或は酒をすゝめ、衆香を焼いて、しきりに酒池肉林の贅を盡す。そして、その間は絶えず、哀艶たる樂の音がひびいて、烟の如くこの世の榮華が、立籠めてゐる。けれども、どうしても太子の心は浮き立たない。その中にあつて、ひとり、鬱々と沈んでをられる。そこへ突然父王から、孫が生れたといふ歡びが、早使を以て知らされる。すると忽ち、一座は水の如く森とするが、またすぐ別な歡びが、火の如くに起つて来る。優陀夷は、こんどこそは太子の心を、引立て得ようと歡び勇んで、太子の前へ、ころげるやうに飛んで出る。太子も、急に變つた周圍の空氣に、怪訝な面持をしてをられる。

「太子さま、お歡びを申し上げます」

「優陀夷、何か起つたのですか」

「いや、起つたところではありませぬ。あの王子さまが、お世嗣の王子さまが、

唯今御誕生になつたとの、お知らせが、参つたのでございます。お妃さまも、いと御健勝だと……」

(太子みなまで聞かず——しかし、重苦しい面持で)

「ええ、王子が……(胸中、何事か湧き起つたやうに、言葉の尻を低く落いて、黙りこむ。やゝあつて、思ひ入つた浮き立たぬ調子に) あゝ、さうでしたか。お父さまのお歡びは、嘸かしてせう。すぐに使の者へ、すぐ歸りますからと父上へ、お傳へ申すやういつておくれ」

「はゝつ、畏こまりました」

(優陀夷室を出づ。太子後を見送りながら溜息して獨語する。)

「また恩愛の絆きづなが一本、ふえて來たのか。さうだ、生れた子供は、可愛さうだが俺にとつては、恐しい羅睺らご維ご(邪魔物の意)だ。(この語を聞かれた父王は、それとも知らず、誤つて王子の名にしたといふ。)あの、日の光を障へて日蝕を起すといふ、恐ろしい惡鬼神の羅睺阿修羅(Rahusura)のや

うに、私を苦しめにこの世へ來たのだ」

(しかし一座は、誰れもこの悲痛な呪の聲を耳にせない。また新たな歡びに、酒と歌とが狂ひ立つ。優陀夷そのうちに使を歸して戻り來り、太子の還啓を皆んなに傳へる。一同、あはてゝ準備にかゝる。)

最後に、太子還啓の鹵簿、王宮近くへ進み來る途中の景。とある宏壯な邸宅まで來ると、そこのペランダの上に、一人の美しい乙女がゐて、太子に向つて、熱い戀の歌を捧げる——彼女は、やはり王家の一族で、キサー、ゴタミ

— (Kisā-Gotami) —

幸多きは、君の父かな

幸多きは、君の母かな

この子を持てる、父母のさち

それにもまして、この夫に

彼女の出家

かしづく人の、歡びや、さぞ

「車を止めよ」(太子歌を聞きつけて、かく命じ、車窓より顔を出して、つけてゐた寶玉の頸飾を手に取り)「優陀夷、これをやつてくれ。姫の歌は、ともすると後頸を捉まされるこの私に、尊いことを教へてくれた。廣い世界で、私のほんたうのことを知つてゐるのは、キサーだけのやうに思はれる。私は感謝する。これはほんのお禮のしるしだ。さういつてこれを、渡しておくれ」

(優陀夷は更に意を解せぬ如く、不審氣に、太子の顔を凝視めて、さて命のまゝに頸飾を、姫に傳へる。姫はそれを抱いて、泣くやうに感激してゐる。太子それを眺めて、また思はず嘆息をする)

「可愛さうに、姫の面は烈しい戀に瘦れたやうだ。たつた一つの頸飾が、あのやうに狂はしう、蘇らせたのだもの。けれども、姫の歌つた「幸」と、私の聞いた「幸」とには、雪と炭との距てがあるのだ。恩愛を歌ふものと、それを呪ふと聞く

もの——恐ろしい差だ。しかし、姫にはそれも解らぬだらう」(人には聞えぬ小さい聲だ)

(獨語終つて、幽籟また進み出す)

釋尊に就てのフィルムは、こゝで途切れた。しかし阿難は、これだけで充分に、釋尊の女性に對するおこころを、汲取ることには出來得なかつた。それはあまりに懷疑的否定的にすぎてゐて、頻婆沙羅の后宫の人たちや、また耶舎の母など多くの女性を、お救ひになつた今の世尊のお心と、可なり遠いものゝやうに思はれたので——その時彼の定鏡へ、嘗て彼自身も關係をした、難陀とその許嫁との經緯が、ふと惱しく映り出た。

難陀は釋尊の弟で、阿難にとつては從兄にあたる。釋尊の出家後、その後を得て、和續人と定められた。そして、父王も齡をとられるし、難陀も二十歳近くになつたので、近々結婚もする王位もつぐ、といふことになつてゐた。それがてう

ど、釋尊が出家成道後、初めて歸城せられた頃である。歸城せられた釋尊は、王城には泊られないで、すぐ郊外の森へと行かれたが、その時、難陀や阿難や、その他多くの若い王子たちが、ひどく釋尊の人格に魅せられて、み跡を慕うてついて往つた。フキルムの始まりは、そこからである。

(釋尊とその弟子衆及び難陀、阿難等の王子たちが、宮門を潜つて街に出る。街の一劃に宏莊な宮殿があつて、その窓際に、貴族の姫が凭れてをる。文なす美しい髪を二つに捌いて、涼しい風になぶらせてをる。ふと、釋尊の一行に氣がつき、その中から難陀を見つけて、愛にみちた聲でいふ)
「おや、難陀さまどちらへ！早うお歸り下さいませよ」

(難陀の眼強く光る。釋尊早くもこれを悟つて、眼で制さる)

「難陀。あの人は、お汝の知り人ですか」

「はあ、あれは、許嫁の孫陀利難陀(Sundaranandā)です」

(難陀、さうは答へたが、しかし釋尊の威嚴に押されて、すぐ口を噤む。そして何度か持つてゐる釋尊の鐵鉢を、隣りの阿難に渡して、遁げようとする。阿難はそれを、見て見ぬ振りで澄して歩む。難陀、氣をひかれながら、つい、する／＼と釋尊について行く)

(場面一轉。尼俱盧陀林の釋尊の宿所。釋尊と難陀と阿難と、三人しか居ない)

釋尊「難陀。お前の心は、この二三日といふもの、あまりにそは／＼してゐるやうです。一たい、どんな心配があるのです」

難陀「……………」

阿難「世尊。難陀さまの胸には、戀のほのうが燃えてゐるのです。あの、こちらへ参りまする途中で、許嫁の姫に會はれたのです。その時、可愛らしい姫が、片手を窓の格子にかけて、片手で白い絹をふりながら、難陀さまを喚んでゐました。

それを、眼に見えるやうだと、私に話されました。どうか、難陀さまを、戀の淵から、お救ひになつて下さいませ」

(釋尊軽く點頭うなづいて、禪定に入られる。すると忽ち、焰々たる大林の火災が、見るも恐ろしくそこへ現する。火災の真ん中に、一本の焼木が残つてゐて、そこに、尾も耳も鼻もなくなつた、一匹の不具めの女猿がゐる。難陀も阿難も、思はず視線を側わきへ外そらせる。やゝあつて、火災の森は自然に消えると、今度は、血をそくるやうな天上の樂園が、ふはりと浮き出る。中には、眼も眩やみ魂も消けこむやうな、きらびやかな天女が五百人ほど、列を造つて現れる。帝釋天を朝拜するのに、ずつと遙かに見ゆる天宮へ、出懸ける途中であるらしい。難陀は氣を奪はれて見入つてをる)

釋尊「難陀よ、お汝は、これらの天女と、許嫁の孫陀羅難陀そんだらなんだと、どちらを好きだと思ひます」

難陀(突然の仰せに驚きたる面持)「はつ、あの、それは天女に比べたら、まるつきりさつきの、不具かたはざる猿のやうに劣つてゐます」

釋尊「どうだ、この一人を妻にしますか」

難陀「そんな事が出来ますか」

釋尊「出来るとも。しかし孫陀羅のことが、忘れられますか」

難陀「忘れますとも——若しかほんたうの、ことでしたら」

釋尊「さうか。ほんたうですとも。それだつたら、これから五六年のことだ。修行を積みなさい。天女は、人間を戀するやうでは得られない。法を戀ふるもの、さうです、清い世界に心をおくひと、天女は、さういふ人を愛してくれます。」

難陀「さうでありますか。世尊ぼとけさま。私は、私は、もしかこのやうな天女たちを、戀人に出来ることがほんたうでしたら、五年はおろか、一生をでも、ここに止まつて修行をします」

(定鏡のフ井ルムこまできゆ)

「おゝ世尊は、大慈大方便に在します」——阿難は、思はず救はれたやうに叫んだ。と一しよに忽然と定から醒めてゐた。彼は、今一度定中の出来事を、咬みしめて見た。そして、すべての解決が、最後に味つた難陀への世尊のおこころで、とき得ることゝ深く信じた。あの時の巧妙な世尊の方便は、不思議なほどに力強く、難陀の心を動かした。難陀はその後、天女の戀を縁として、間もなく立派な法を證悟した。そして、「私は世尊の御方便で、天女に比したら比らべようもない、立派なものを妻とした」といつて、今でも深く感謝してゐる。「すべては佛陀のおはからひに、在しますのだ」——阿難はそんな感じに、強くうたれた。

日はもう正中をすぎて、影だつたら、一寸位にしか映らぬほどになつてゐた。思索のために、時のたつのも忘れてをつた阿難は、驚いて立ち上つた、そして、

遁げるやうにすたくくと、森の中を驅けて出た。森をぬけると、もう土が、炭團のやうに焼けてゐた。そこを素足で踏んでみて、初めて朝早くから出てゐたことを、阿難は氣附いた。

「申しわけのないことだつた。世尊は定めし、御心配で在すだらう」

さう思ふと、熱いことなど思ひもよらない。「一時も早く」と、精舎の方へ駆け出した。

四

てうど、精舎の門にすぐ近い、大きな榕樹のあるところまで、阿難は、息せききつて駆けて来た。恐ろしい炎天の中を、あまりにつゞけさまに駆けたので、とうとう、榕樹の根もとで轉げてしまつた。彼はしばらく、榕樹の深いかげらひの下で、貪るやうに寝そべつて、思ひざまに大地の冷氣を、呼吸した。

その時だつた。突然、彼の耳へ、精舎の方から密々とした人聲が、忍びよるやうに草の穂面を、撫でる來るのに氣がついた。

「何だらう」

彼の耳は、あやしく二三度、聲する方へ戦いた。聲は確かにする。しかもどうやら、異性のやうにも思はれる。彼のからだは、ばねで弾ねられた如く、飛び起きた。そして、榕樹の幹に寄りそつて、注意深い眼を光らせた。するとそこには、

ついで見慣れぬ物々しさが、矢のやうに瞳を射て来た。市のやうに集つた門前の人むれ。揃ひも揃つた粗末な葛衣に、くるく光つた坊主首。お弟子でもなければ、外道らしくも思へない。

「一體何だらう！」

彼の驚異は、ますます太つた。

「兎に角往つて見たらば——彼はさうきめて、驚きと疑に絡まる足を、榕樹の影から引き出した。

「おや、阿難さまではなくて」

先方でも、すぐこちらに氣附いたらしく、一人のささやく聲が、はつきりと響いた。しかもそれが、疑ひやうのない女の聲だつた。

「おや、俺を知つてるらしい」

阿難の足は、またすぐ鈍つた。そして眩しい日光を、小手で翳して、じつと群

衆を見直した。けれども、その時はもう先方では、阿難のすがたに喜び立つて、波のやうにどよめいてゐた。そのうち、二三のものが群衆を左右へかきわけて、阿難に向うて表に立つた。そして、胸を押へるやうに兩手を合せて、溢るゝ喜びを阿難へ注いだ。その刹那、鋭いほど力強い愛の交叉が、双方の瞳に刺し合うた。

「おや、夫人と妃だ！」

すがた形は、恐しく違つてゐたが、直覺的にそれだと氣づいて、阿難は思はず駆け出した。妃も夫人も、待ちくたびれた喜びに、抱き取るやうに阿難を迎へた。三人は、まづ何から話していいのだから、たゞ胸だけが、一杯になつてゐた。やはり先だつたものは涙で、しばし無言のまゝに手と手を、握りかはした。

「たい、これはどうなさつたすがたです」

阿難はやう／＼に口きつた。

「實は私も、こちらへ參つてからは、毎日のやうにお二人のことを、案じてゐ

ました。今日も今日とて、何だか朝から氣になつて、あの杜へ隠れて、考へこんでをつたのです。それに、かうも偶然に、お會ひしようとは、全く夢ではないかと疑はれます」

まづ、不思議に變つたすがたから、疊むやうに問ひかけた。

「はア。御不審も尤もですが、實は委しい仔細は、かうなのでございます」

些し心臓の昂ぶりを、押し鎮めて、夫人と妃はかはるがはる、仔細の話を語りつづけた。それによると、尼俱盧陀の森の宿で、切ない二人の請が、拒まれたその日から、二人は鬱々と淋しい日をば經てゐた。ところが、先に夫や子に出家せられた迦比羅や拘利の妃や母親たちが、これも浮世を儚んで、是非出家したいといふ願を持つて、二人の許へ相談に來た。すると、これを聞いた二人の侍女や、またそれ等の妃たちの侍女どもが、妾たちも一しよにどうぞと、願ひこんで來たのであつた。かうなると、一旦は諦めてゐた二人の願求が、また火のやうに

燃え立つて来た。それではといふことに、心をきめて、いよいよお願ひに出かけようと、打合せが出来てしまつた。しかし、もう既に一度、お断りがあつたことゆえ、今度はよほどの決心を、すがたの上でも見せねばならぬと、見らるゝ通りに、皆んなが丈なす黒髪を切り捨て、身には、世捨人に相應はしい粗末な衣を、雄々しくも着て、旅立つたわけである。途中でも、何どか消えいりさうな疲に、襲はれた。その度ごとに、侍女たちは車をすゝめ駕籠をすゝめた。然し、いつもの物見遊山とは違つて、今日は王者も奴隷も區別のない、尊い道を求めに行くのだから、さういつて、強いて迦比羅衛から吠舍離のこの重中閣講堂まで、百里に近い道のりを、とう／＼習はぬ徒歩で、押通して行つて来た、といふのであつた。

阿難は、二人の話の終るまで、たゞ涙をすゝつて聞いてゐた。強くうち震ふ感激は口さへ容易く開けさせなかつた。疲勞に瘦れ塵にまみれたそのからだ。水腫のやうに脹れ爛れた双の足。阿難はもう、真正面に見上げる勇氣さへ、出ては來

なかつた。

「ではしだらうこゝで、待つてゐて下さい。一つ私の方から、お願ひしようと思ひますから」

やう／＼のことで、阿難は云つた。彼の性急な感激が、もうじつとはしてをられぬやうに、奮ひ立つて来たのであつた。

「はア。實は、さうお願ひが出来ましたらと……」

降るやうな炎熱を浴びて、精舎の門前に待ちくたびれた女の群の、期待する目標は、たゞ阿難に會つて、阿難から世尊へ願つて貰はう、といふことだつた。それが、頼まぬさきに阿難の方から、こちらの期待を見ぬいてくれたのは、實に渡りに船の歡びだつた。しかし、阿難は夫人の感謝を皆まで聞かずに、躍るが如く、精舎の中へ駆けこんだ。

阿難は、釋尊の前へ出て見ると、さすがに氣が臆して、言ひかねた。今朝から精舎をあけてゐたこと、それも遽かに氣がさして、何とはなく、四圍が暗いやうな感じすらした。釋尊は、早くもそれに氣づかれて、嫌すやうに柔かく、

「阿難ではないか、どうかしましたか。大さう氣色が、勝れぬやうに見られるが」

とお言葉を、かけられた。そこには、少しも咎めるやうな、嚴しい表情が出てゐない。いつもとかはらぬ、優しい情けが充ちてゐた。阿難は、救はれたやうな安堵を、ほつと吐いて、

「世尊よ、私は、朝早くから精舎を放けて、杜に籠つて禪定に入りました。先だつてのことが氣になつて、女人と出家、女人と罪惡、女人と佛性、女人と教化などといふことを、じつと考へてみたのであります。その結果は、たゞ全知全能で、しかも慈悲ぶかく在します、世尊のおはからひでなくては、とても知れるこ

とではないのだと、領解出來ました。世尊、この領解が出來た時、ふと禪定から覺めました。そして、長い間お給仕を、忘れてゐたことが氣になつて、懸命になつて杜を出しました。てうど、あの榕樹のかげまで驅けて來ますと、私は大せいの群衆を、この門前で發見しました」

阿難は、正直な比丘であつた。ここまで、些しも偽はらないで、云つてしまつた。しかし、それから後が、また云ひにくい魔がさした。

「ほうう。さうでありましたか。いや、たまには眞面目に、さういふ問題に觸れるもよからう。そして、その群衆は何でした」

釋尊の態度は、どこまでも情けが篤かつた。弟子たちに、どんな場合でも、氣怯れがして云ひたいことを盡くさせない、といふやうな、強いものは見せられなかつた。弟子たちは、この態度に、つい吊り上げられたやうな氣になつて、いつでも、親のやうな親しみを、持たされた。また、神さまの前に出たやうな、偽は

れない気分にも、彼等はなつた。

「世尊、私は全く驚きました。それは、それは、實に夫人と妃と、一族の方々ばかりなのです。しかも、皆んなが頭を剃られて粗衣をつけ、裸足はだしで日の中に立つてをられるのです」

阿難は、釋尊の情けに勢を得て、とう／＼すべてを、明いてしまつた。しかし釋尊は、そのことは既に聞いても居られたし、また、出家を請ふためだらうとも察して居られた。で、嚴重な態度を知らせるために、外の弟子たちへは、あまり取り立てをせぬやうにと、告げておかれたほどである。

「阿難よ、その人たちの用向は、もう私には解つてゐます。それで、お汝まへに何か頼みでも、しはせなかつたのですか」

釋尊の、この凡てを呑みこんだやうな、先の光つたお言葉に、またも阿難は、ぎくりと詰つた。

「阿難よ、きつと頼みがあつたでせう」

釋尊は、つきいるやうに阿難の顔を、讀んでをられた。阿難は、強い衝動シヨツクを感じはしたが、むろん、躊躇らふ場合でないと思つて、

「はい、夫人が願はれました。如來が宣説したまう教意教條を奉じて、女人が出家して教團へ入ることを、どうぞ世尊に願ひ申して下さいと、被仰いました。世尊、夫人たちの決意の堅さは、あの、見變りはてたすがたにも、充分に出てをることゝ思ひます。どうぞ、夫人たちの切ない請を、許してやつて下さいますよう、阿難からも、篤と願ひいたします」

力一ばいの勇氣を絞つて、彼は願つた。しかし、釋尊の決意のいろは、山の如くに不動を示した。

「阿難、重ねてそれを云つてはくれるな」

お言葉はたゞそれだけだつた。しかし、怯んではゐられない。阿難は更に、勇

氣を絞つた。

「世尊よ、女人は本質的に佛たるの資格がないとでも、仰せになりますのか」

「いや、女人とても、大丈夫、佛にはなり得るのです。それは男と、同じいことです」

「それでは、女人がどうして出家が出来ぬでせう」

「阿難よ、もう何んにも云つてはくれませう。如來は、一切を憐れむのです。女人の請を、許したいのは山々なれど、しかし、それこそ尊い法が——たとへば一千年間このまゝに存続するものならば、女人の出家を許いたために、五百年間縮まるだらう。また、如法に道を修むる比丘たちも、必ず氣をくるはず事も起るだらう。或は、外道のそしり、信者の供養にも、距て心が出来るだらう。いはゞ、女の出家を許すためには、いろ／＼な方面に思はぬ罪惡を造らせる、といふこと

にもなるのです。阿難よ、一家のうちに、女のみが多くて男の方が少くあつたらその家は、容易に盜害を受けるでせう。この道理が呑めますか」

「はア。よく解ります」

「阿難よ、良田に雜草が繁り、麥田に徴症くろはがついたと同じいことです。女人の出家は、教田を暴す基なんだから。その邊をよく辨へてくれ。そして、夫人たちにもよく諭して歸して下さい」

釋尊のお言葉は、宛かも水攻のやうに諄々と、阿難の胸にこだはつて來た。けれども、こゝろ一と息で切りぬけなくては、といふ滿身の努力が、最後の塞とつてによる如く、阿難の口を衝いて出た。

「世尊よ、佛意に逆らふことは恐ろしいことです。しかし、あれほどに強く固まつた、女たちの心も、些しは顧みて、頂けますまいか。世尊よ、波闍波提は世尊にとつて、恩義ある方でも、あることですから」

さすがに阿難の情熱は、火の如くに燃えてゐた。鐵でも金でも、焼け溶かさずば措かないやうに、爛々と燃えてゐた。釋尊の瞳も、雨龍の如くに濡うるひをおんで雨か風か、怪しく光つた。

「阿難、許してやらう」

佛勅は、閃光の如く阿難を壓した。

「ほんたうで、ござりまするか」

あまりの急遽なお許しに、阿難は、我れと我が耳を疑ふやうに、鸚鵡返しにお訊ねをした。しかし、佛意に二重は、あり得なかつた。

「ほんたうだとも。しかし阿難よ、如來わたしはそれを實行するに先だつて、女たちに、八種の誓約ちかひを求めます」

「八種のお誓約と云ひますと？しかし、世尊、あの人たちの出家の前には、恐らくどんな試練でも、きつと容易たやすいことでありませう」

お許し！たつたそれだけで我が事のやうに、満足しきつた阿難の頭は、八種の誓約といふ言葉すら、軽々しいものに響いてをつた。

「しかし阿難よ、八種の誓約を守り立てるは、我がまゝな人間として容易なことではない筈だ、如來がこれを定めるものは、てうど、氾濫を豫防するために土手を築くやうに、將來の教團の氾濫と、また彼女等の放逸を、豫て防いでおくために、設定しようとするのです。その一は

(一) 出家して百年になつた比丘尼(女)でも、今出家したばかりの比丘(男)に對して、敬禮きやうらいの禮を取らねばならぬ。

これは、女は感情が強いので、つい僥慢に陥り易い。また、今の世間のならばしが、女よりも男を先にしてゐる、そして、比丘も比丘尼も、みんな、その空氣の中で育つて來たのであるから、さうする方が兩者の間に、放逸も起りがたいと思はれる。しかし、比丘尼相互の間では、世間での地位の尊卑も問はないし、また、

年齢の高下も論せない。たゞ、出家の年月の新古を以て、比丘の如くに秩序を取つていくだらう。それらの事は、すべて比丘の教團に真似ていく。次に

(二)夏の雨期になつて安居あんご——研究時期に入る時は、必ず、比丘と一しよに居らねばならぬ。

阿難よ、満一、比丘尼ばかりであつたなら、在家の人から犯されるやうな恐れもあるから、必ずこの誓約を立てねばならぬ。

(三)半月毎に——自分の終(十四又は十五日の満月の夜)に、布薩ふさつ(E. Uhosatha)を行つて教團の法律である戒律を読むこと、また、黒分の終(二十九日又は三十日)に比丘から教化を蒙る——この二回の行事を、嚴重に勤めねばならぬ。

(四)毎年の夏安居げあんごの終には、比丘の如くに自恣じしを行はねばならぬ。即ち、その夏中で自分の行に、教團の法律に觸れるものがなかつたか、若しあれば懺

悔し、あつて秘せば覆藏罪びくそうざいとして、嚴しく罰する。また、自分でないと思つても、猶ほ念のために、誰か見てゐたものはなかつた、また評さだけでも、聞いたものはなかつたか、更に、疑はしいとだけでも、思はれるやうな事がなかつたか、一々尋ねて、若しあつたら、かくさず懺悔をせなくてはならぬ。

阿難よ、以上の二項は、大體比丘とも同じいことだが、しかし、悲しいことには、女は一般に教育が低いのであるゆゑ、特に注意を要することだ。

(五)比丘尼が重罪を犯した時は、比丘比丘尼の兩教團の前で、十五日間不慢の行を實行する旨誓はねばならぬ。これは、比丘とても同じいことだが。

(六)教化の免許(比丘尼としての具足戒)を受くる前に、二年間は學女(式叉摩那 *Siksamāna*)といふ修行を要する。それは、畜生を殺さないこと、錢を盜

彼女の出家

らぬこと、手姪をせぬこと、小妄語も致さないこと、定まつた時間の外は食べないこと、酒を決して飲まぬこと、この六法である。二ヶ年間この修行を終へて、それから、一人前の比丘尼となるを、許すであらう。

阿難よ、男子は、八歳から沙彌(梵. śrāmaṇera)となつて佛道を見習ひ、二十歳に達して比丘となるを許して居るが、女子も、八歳で沙彌尼(梵. śrāmaṇerikā)となつていくだらう。しかし、二十歳になつて、比丘尼となるに先だつて、二ヶ年間は學女(がくによ)として今いふ六法を、守つてほしい。それは、女は男と違つて妊娠をする。若し、沙彌尼の間に孕んで居つて、それを知らずに比丘尼となれば、比丘尼が子を産むといふ、悲惨な事が出来てくる。それでは、教團の統整も面倒だし、また、女自身にも可哀想だ。それで、學女生活の二個年間に、この疑懼を除き去りたいと思ふのである。

(七) いかなる事があらうとも、決して比丘を謗つてはならぬ。

(八) 比丘からは、つとめて教誠を受けねばならぬ。しかし、比丘を教誠しようと、思つてはいけない。

これも大體、男女の個性や社會の習慣を考へて、出来得る限り教團の安定を、前以て期しようと思ふためだ。

阿難よ、如來(わたし)は女人の出家を許可する前に、この八條の誓約を、彼女たちに求めるのです。これは、八尊師法と名けて、絶対に嚴守を要するのです。これさへ誓つてくれるなら、如來は、直ちに出家を許しませう」

阿難の心は、狂はしく歡び立つた。

「世尊よ、私は直ぐにもこの歡びを、夫人たちへ傳へるでせう」

と、いつもの緊張を失つて、そくそくと門外へ駆け出した。釋尊は、その邪氣のない舉動(ふるまひ)を、可愛(よろまひ)いふものに、ゆるいてをられる。

「おろ、お喜びなさい。とう／＼お許しが、得られたのです」
雲行きを案する多くの女性を、再び門外に見出すと、阿難は何よりさきに、ま
づそれを叫んだ。

「お許しつて、それはほんたうの事ですか」

夫人も妃も、また多くの女子たちも、矢張り意外な出来ごとのやうに、驚いた。
そして、云ひ合せた如く、阿難のぐるりをとりまいた。

「ええ、ほんたうですとも。しかし、世尊は、仰有いました。まづ出家を許す
その前に、八種の誓約を立てなさいつて」

かういつてから、釋尊の説かれたるそのまゝを、一句一言落さずに、語り傳へ
た。しかし、女たちに見ても、矢張り喜びの前の、小事であつた。むろん、
誓へる誓への躊躇はない。彼女等は、たゞ喜びと感謝にみたされて、獻^{すゝめ}献^{すゝめ}すら
してをつた。夫人は、やう／＼に感極まる胸を鎮めて、

「阿難さま、幾度か願うて許されなんだ幸せが、今あなたのお蔭で叶へたので
す。妾たちの、この張り充ちた喜びを、どうぞお察し下さいませ。八通りのお誓
ひ！何と容易い、そして結構なことせう。てうど、沐浴^{ゆあみ}して奇麗に梳^{くしり}づつた若
い女の髪へ、華鬘を頂くやうな、また、香の高い美しい花束を、喜んでお受けす
るやうな、歡び勇んだ心持で、世尊の御制定になつた八戒を、お受け致すござ
いませう。たゞこの上は、一時も早く、お許しが願へますやう、重ねてのお取計
ひを、どうぞお願い致します」

といふのであつた。その聲の旋律は、一節ごとに歡びと感謝の表象^{シンボル}だつた。そ
の瘦れた顔には、もう暗いものが除かれてゐた。並みゐる婦人たちも、矢張り同
じい波に打たれてをつた。阿難も、ほころびるやうな満足を、兩の手でかいしめ
てゐた。かくてしばしは、言葉もなく、動かうともせず、たゞしげ／＼と歡びの
中に浸つてをるのだ。

ヒマラヤの絶頂を、日はとつづくに上つて、紫色にとけた平和な餘光を、あたり一面に撒いてゐる。地を萌ゆる草々も、新しい蘇りのすい風^{スイカゼ}に、すやくくと恵まれてゐる。たゞさし迫る夕靄だけは、久遠の謎を投するやうに、業海に沈まる前途の運命を、常闇の中へ捲いて行く。(大正二、八、一八於洛東客寓欄筆)

殉 教 者

目次

一、若き佛教徒……………一

二、入竺求法僧……………九

三、印度の道に殉せし人々……………三〇

 一、目連尊者31

 二、蓮華比丘尼33

 三、摩訶男35

 四、サーマプテ138

 五、迦那提婆尊者41

 六、師子尊者48

 七、クラニヤ僧正55

四、支那の法難……………六九

 一、兩種の文明の邂逅69

 二、「法の興廢在此一擧」71

 三、種々の法論76

 四、魏の武帝の廢佛86

五、日本佛教の精神……………一一六

 一、吉水の法難116

 二、薩摩の法難122

 三、菊間藩事件131

殉教者

一、若き佛教徒

薄暗い夕暮だ、雨を妊んだ雲が低く垂れて、向ひの庭の丈の^{せい}高い柳の樹の枝にからんでゐる。たつぷりと水を汲うた地面はじめぐと濕うてゐる。空氣迄が厭に濕つぼくて、汗ばんでゐる丈か、著てゐる衣服の^{きもの}膚ざはりがじとんくして氣持が悪い。氣がめいり込む様だ。淋しい、たまらなく淋しい。「おれは若いんだ」かう叫んで見ても、矢張り淋しい。青春の喜びが何處にあるんだ。「若き日の爲めに」と歌うたその若さの誇りは今何處へ行つたんだ。淋しいと來たら何でもすべてが淋しい。あの柳の樹の澤山な葉といふ葉が、夕暮の風にそよいでゐる姿は淋しい心を訴へるその象徴ではないか。葉蘭の若芽が大い葉を押しつけて元氣に出

てゐるのも、思へば哀はれな呪はれたものゝ姿ではあるまいか。今し方、空をかすめて飛んだ一羽の小鳥！、この悠久な天地に何を考へ何を思うて生を托してゐるのであらうか。何が生命の神秘だ、はかない短かい小さな生命ぢやないか。この小さな生命の生滅には何の關りもなしに、悠久な天地はぐんぐん廻轉して行くではないか。野の百合が力一杯に咲いても、それは東の間の榮だ。美しい聲を張り上げて、軒場の小鳥が囀つても、それもホンの夢の間だ。そしてそれらが、反省の意識なしに、生の衝動に驅られての動作だと知ると、寧ろそれは呪はれた悲惨ぢやないか。然しかうした思考の世界が許された人間も、祝福された生とは思はれない。何故なら思考は却て、このたまらない淋しい心を生むのだから。青年はかう考へて来て、自分の胸の奥に巢喰うてゐる憂の小鳥を見つけた。それは灰色の翼をした、赤い鋭どい嘴をして、ちくりくと心臓の扉をつくく小鳥であつた。

心臓の内には悔恨の蟲が巢喰うてゐた。それは小さいが、矢張、針の様な鋭い嘴をした蟲であつた。憂の小鳥に眼ざまされて、今度は斷え間なしに、自分の巢の肉壁をつついた。血が赤くにじみ出た。

青年の心はかうして憂ひの小鳥と、悔恨の蟲に喰はれて行つた。青年の顔にはだんぐりと血の氣が失せて、暗い陰を宿して來た。今や何にも彼のうつろの心を満すものはない。今まで彼が生命として逐ひ廻つたものは皆うたかたのはかないものとして、又は悔恨の蟲を育てる糧として彼の心の舞臺から落謝し去つた。戀か、それは暫しの空を彩どるあえなき榮ではないか。酒か、それは身と心を破る毒ではないか。彼は内のうつろに堪へないで、何物かを求めつゝ、その何物かを見當らないで焦燥つてゐる。それは高い空からの光か、内なる奥からの泉か、憂の鳥と悔恨の蟲とは、彼に堪へ難い思ひを與ふると共に、彼の心の扉を開いて、彼をして何物か來つてその心の殿堂を満すべく待ち設けさせてゐる。

たまらない淋しさと、何物かを求めてゐるもどかしさから、彼はふら／＼と室

を出た。いつしかさびれた裏通りの土塀で囲まれた一劃を歩いてゐた。土塀は兩側に高さ低きいろ／＼の姿につゞいてゐる。土塀の中にはクラシカルな古い建物が並んでゐる。それが夕闇に静かな清調を湛えて、しんみりした氣分を起させる。不圖何處からか、緩かな旋律が流れて來た。單調なさびれた肉聲ではあるが、それが又却つて夕暮の調子とびつたり諧かなうて、彼の心の肌を柔かく撫でた。焦らつてゐた氣持が靜かに融けて清らかな喜びさへが湧いて來た様に思はれた。彼は直ぐにそれが誦經の聲であると悟つた。さうだ、この世界だ、あの今迄は自分とは何の關係かへりもなかつた聖者の道！そこから光がさし泉が湧くのだらうと彼は思つた。

彼は後ろから逐はれるものゝ様に、新らしい道へ走つた。前からもひきづられるものゝ様にすん／＼進んだ。進んでも進んでも求むるものは與へられななんだ。却つて心の壁に寫る陰影かげは深さを増し、動亂のすがたが眼に餘る様になつた。堪へられない苦しさの日は續き、懊惱のうめきを洩す夜がこれに續いた。このコ―

スを離れたらばとも思つた。物を思はなかつた昔が戀しくもあつた。然も一旦放れた矢の様に、引き返すことも、傍に外れることも出來ななんだ。「光は東方より」その東方の微かな光を望んで、傷ついた痛い足を引きづり／＼進む外なかつた。それは曠野の旅であつた。熱風冷雨にさいなまれて草も木もいちけきつた淋しい曠野であつた。かすかな光をめあてにこの曠野に立てば、涙は自然にその顔を濕した。語らふ友もない苦しみを分つ道連れもない四顧茫茫。たつた自分一人だ。目當はあの明滅するかすかな光がある丈けだ。他は皆恐しい脅迫の種だ。天が落ちてこの身を包むかも知れない。地が裂けてこの身を吞むかも知れない。この脅迫の曠野をとぼ／＼と辿行く心細い姿！こんな哀れな慘めな姿が又とあらうか。然し、不思議なことにはかうした旅を重ねると同時に、法の權威は次第に重さを加へた。暗い心の室の中にも時々平等一如の光がさして來た。冷たい胸の血潮も、慈悲恩愛の乳にぬくめられた。光は天上から、また毅然として道に殉じた聖

者の行からさして來た。泉はどす黒い罪惡の土の下から湧いて來た。道が唯一の生活の指針となつた。生活を擧げて、大法の指令に従ふやうな決心が出來て來た。彼は振り返つて、反省のなかつた以前の生活と、心の扉の開きかけた時分の懊惱とを見て、感慨に堪へないものがあつた。感謝の思が油然として湧き出して來た。「救はれた」。かういふ感じが胸一杯になつた。よし法への奉仕だ。如來大悲の恩徳は、身を粉にしても報すべし。一生を教役の爲めに捧げよう。この小さな弱い自分が佛化に參することが些かでも出來れば、それは望外の喜びと曰はねばならない。師主知識の恩徳は、骨を砕きても報すべし。醜^{みにく}るしいこの身體が佛國土莊嚴の聖業に列することが出來るとは、何といふ光榮であらうかと彼は喜んだ。

然し彼の生活は勿論かうした法悦丈けではなかつた。奉仕の念に燃えてゐる丈けではなかつた。恨みねたみ腹立ち可愛い憎いの念も絶えず流れてゐた。彼は愛欲の廣海の浮沈を悲しみ、名利の大山に踏み迷うてこゝろ痛んだ。只かうした思

ひの下から儼然として動かすことの出來ぬ法の指令を感得して心丈夫であつた。法の指南車は始終、彼れに光へと進軍せしめてゐた。

天には明暗があり、地には日夜の交替がある。水は火と戦ひ、天は阿修羅と争うてゐる。されば善は惡に挑まれ、神は惡魔に挑戦せられる。惡に依つて善が愈愈その輝きを増す様に、惡魔との戦に依つて、神はその光を四方に照す。大法の上にも時々惡魔の手が下る。羊が神の野に恵みの草をはんで、天の榮光を讃えてゐる時、忽然として惡魔は狼と顯はれて羊を驅る。羊は悲鳴を擧げて逃げ廻り、或は谿に落ち、或は狼の牙に倒れる。然し多くの羊が羊飼の嚴肅な指令の下に、一處に固まつて些^{すこ}の動搖^{どうごう}も見せない時、狼は尾を捲いて逃げる。そして其處には嘗てなかつた平和が輝やく。惡魔の手が或は王者の劔となつて、大法の上に下ることもある。異教徒の烈しい嫉妬となつて信者の上に降りかゝることもある。

我が青年はその信念が漸やく圓熟の境に達した時分、この惡魔の手が雲間に閃

くのを見た。彼の心は暗くなつた。恐ろしい暴風雨を豫感した。さうして、その暴風雨の中に毅然として立たうといふ決意が起つた。それは弱い人間に取つてはかなりの重荷であつた。大法は弱い彼を通して輝きを見せた。彼は法難の暴風駛雨の中に立ち通した。砂に打たれ、岩の破片に傷つきてその足場の岩がくづれて横に倒され、骨を碎き血を流して立ち通した。肉が破れて血が涸れても暴風を通すまいとする様に両手を擴げて立つてゐた。崇高なこの瞬間が過ぎた時、さしもの暴風もないだ。彼は遂に力が盡きて地に倒れた。不思議なことには、その不毛な岩の上にも、彼の血潮から幾多の美しい花が咲き出でた。

この青年は誰であらうか。彼は弱い男だ。然も不思議な強さを持つてゐる。彼は餘り美しいことはない。しかもその底から輝き出る光の所有者であることは何人も拒まれない。この青年は誰であらうか。我等はこれより我が青年「佛教徒」をその三千年の生涯の上に眺めて行かうと思ふ。

二、入竺求法僧

我等の若き「佛教徒」の姿は、『華嚴經』に説かれてある善財童子に依つて象徴せられてゐる。敬虔な魂の前には一切が師であつて、何物も捨つべきものはない。足を大地にしつかりとおろして、左足を踏み出し、眼は遠く天の一方に注がれて、光にあこがれ、合掌して進み行く童魂の前には、天地が皆經卷である。すべて魂を磨く砥石であり、魂を育つる乳である。彼はこのために、渴けるものゝ水に就くやう、貪ぼるものゝ食を求むるやうにあさり歩く。彼は真劍である。すべてを投げ出してゐる。たゞ一つのめあては、魂のほんとうの落付き場を見出すことである。彼はこのことの爲めには千里を遠しとせず、劔山を難としない。いかなる艱苦もこれを忍受して悔いない。遞々葱嶺の山又山を越えて、印度に經典を求めた、かの支那の求法ぐほふの人達は、我が若き佛教徒の求道を代表するものではあるま

いか。

後漢の明帝永年十年に、攝摩騰、竺法蘭の二人に依つて、佛教は初め支那に傳はつた。西暦紀元六十七年である。物質的巧利的な國民性の支那人の中に、離煩寂滅を説く佛陀の教は確に一種の感動を引起したに相違ない。丁度沸騰してゐる熱釜の中に一大氷塊を投げ込んだやうなものであつた。支那人に取つては未見の世界が開かれたのであつた。心ある人々は、皆この新しい教に赴いた。黄ない貝多羅葉の經典が陸續と輸入されて、新しい文化を注ぎ込んだ。安世高、支婁迦讖、嚴佛調、支曜、康孟詳、維祇難、支謙、康僧會、康僧鎧、迫延等の達人が、遠く印度西域の國々から、支那へ移つて、譯經の聖業に従つた。印度の文化はかうしてどしどし支那に移し植ゑられた。然し、それはまだ偉大な印度教學の大系のほんの一部分、曰はゞ、九牛の一毛にしか過ぎななんだ。新らしい文化に志のある者、浮屠氏の教に心喜ぶものは、其の經律の未だ備はらないのが、何よりも残念であつ

たに相違ない。新しく經典が譯出されたと聞けば、直にこれに就いて、貪ぼるものゝ様に讀み耽つた。然しそれも大きな佛教教學の大系から見れば、斷簡に過ぎない。爰に於て、人々は自ら直に西域に行いて經典を求めよう、遠く印度に入つて法を求めようと志すやうになつた。爾來數百年、入竺求法僧なるものを生じ、彼等は支那佛教々學の第一線に立つた。彼等が未開の藪を押しわけ、大沙漠を横ぎり、嶮山に攀ち、河川を徒渉して、生命がけに持ち歸つたものが、第二線に於て翻譯せられ、第三線に於て講讀せられ、第四線に於て布演論議せられ、第五線に於て、やう／＼、民衆の手に渡されて、その心靈の糧となつたのである。この第一線に立つて花々しい成功を遂げた人もあつた。然し中には、瘴烟蠻雨の地にあえなく鬼籍に入つた人も多かつた。彼等は皆熱心な求道者であつたと共に、眞劔な殉道者であつた。彼等の尊い血に依つて、印度文化の精粹「世の光り」は完全に支那に移し植ゑられ、それがまたやがて、支那文化の精粹として花を開き、日

本に傳はつて、日本佛教の實を結んだのである。今われらはその求法僧の中から一二代表的な人々を出してその艱苦を偲び、われらのふかき感謝の意を現したいと思ふ。

朱士行シュシキヤウは潁川エイセンの人である。出家して専ら經典の研究に身を委ね、般若皆空の教を喜び、昔、竺佛朔が譯した『道行經』を愛讀し、洛陽に於て講釋をしたこともあつたが、文字が未だ充分でなくて、意義を盡して居らないのを慨き思ふやう、この經は大乗の至極を説いた經典であるにも拘らず、翻譯も充分でなく、義理も盡してない、誠に残念なことである。今茲に徒らに經典の不備を慨いて居るよりは寧ろこの身を捐すて遠く西域に求めよう。これこそ我が身に契うた、報佛恩の行ひであらう」と。魏の甘露五年(西紀二六〇)家郷を出で、遠い旅に向つた。陽關を過ぎて、西の方流沙の恐ろしい沙漠を涉り、樓蘭ロウランを越え流離困憊リウリキコンバイ、數知れぬ

苦難の旅をして、やう／＼于闐ウツテンに着き、梵書の正本九十章を得た。茲に士行の苦難は報いられた。彼は喜び勇んで先づ彼の弟子弗如檀フニコタンをして、梵本を負うて洛陽に歸らしめようとしたが、計らざる障礙が起つた。それは于闐の小乗の學徒から王廷へ持ち出された訴である。彼等は云ふ。「大乘と云ふは佛の教ではない。淺ましい外道の法である。今この支那の沙門をして婆羅門の書運び出さしむれば、正しい佛の教を亂し、支那の人々を惑はし、大法を滅ぼすに至るであらう。王は地の主である。若しこれを禁じないならば王の咎となるであらう」と。王は非難を恐れて、經典を運び出すことを禁じた。朱士行の失望は想察するに餘りがある。今迄の艱苦は水の泡となつた。一身の榮辱や苦樂や、それらは一度び身を捐てたものに取つて何でもない。自分の志は一意、大法の東流トウリウである。正しい深い大乘の教に依つて、我が功利的な物質的な同胞を救ひその思志を高めることにある。今やこの志は報いられようとして、惡魔の手は永久にこれを阻まんとした。已に

我が力は盡きた、たゞ奇蹟にたよる外はない。茲に於て士行は王に奏して、經卷を焼いてその正否をたゞさんことを願うた。王はこれを許した。やがて王宮の前に薪が山のやうに積み上げられ、油を得て火は天をも焼くやうに燃え上つた。士行は經卷を取つて誓つた。「大法が若し東に流れて、我が郷土の民を救ひ給ふものならば、この經卷は火の中にあつても焼け給はないであらう。事茲に至つては一大命を待つ外の外はない。經典を取つて、これを火中すれば、不思議やたちまち火は消えて、一字も焼けない。表紙の皮はくすぶりもしない。人々皆この奇蹟に感動して、經卷は改めて支那に傳ふことを許された。西紀二百九十一年、于闐の僧、無羅叉が、河南の居士の竺叔蘭と共に譯出した『放光般若經』は實にこの火中にせられた不思議の經卷の翻譯であつた。士行の旅立ちから、實に三十一年目であつた。

士行の目的は果された。然し彼は猶經卷を求めて、于闐に留まつた。遂になつ

かしい郷國へ歸らないで、八十の長壽を保つて、旅に死んだ。『放光般若經』を繙き見るものは、其の經典の歴史が、かういふ尊い犠牲の第一頁で初まつてゐることを思はねばならぬ。

若し入竺にぶぢくぐ求法はふの大成功者を擧ぐるならば、法顯ホツケン、玄奘ゲンシヤウ、義淨キシヤウの三師に指折らねばならぬ。茲には法顯師を出して、その旅行の困難を偲び、その生命がけの大事業の成功を祝ひたいと思ふ。

法顯三歳は平陽武陽の人である。三人の兄があつたが、皆子供の内に死んだので、この子も幼死をしてはと心配して、三歳みつの時に沙彌とした。家にあつてはいつとも病氣勝ちなので、七才の時寺へ送つたが、それから幼體も丈夫になつて寺にゐつとき、家へ歸らうとせなんだ。母親は我が子見たさに家へ呼び返さうとしたが出来ないので、寺の門前に小屋を立て、その出入を見て慰めとした。十歳の時

に父親を失ひ、母一人子一人となつたので、叔父が心配して還俗させようとしたが、「私はお父さんがあるから出家したのではありません。塵の世を脱れて、さとの天地に入りたいために頭を丸めたのであります」と肯んじない。幼ない我が法顯はかくて寺にあつて孜々として勉學することゝなつた。

少年の日のことである。或る日、寺の幼ない仲間の人達と共に、寺田の稻を刈つてゐると、幾人かの盜賊が押し寄せて来て、その稻を奪はんとした。仲間の沙彌達はみな恐れて逃げた。法顯は獨り留まり、賊の頭に云ふやう、「穀物が入り用ならば皆持つて行かれるが善い。だが何故あなた方がかういふことをせねばならないのか、それを考へて貰ひたい。前生に施をせなんだ報いが今の境界だ。然るに今また盗みをしてどんな應報を受けられようか、私はそれを心配する」と。盜賊は小さな法顯の道理に服して、稻を捨て去つた。この小話を以て法顯の人となりを知ることが出来る。

長じて一人前の僧侶となつてからは、行ひ正しく志高く、同學の人達の畏敬するところとなつた。師の患ふる所は、かうして佛の教も弘まり、僧侶の數も多くなつたが、僧侶としての守るべき規則が完全に此の土に傳はつて居らない、或は自分達の行ひの中に知らずして正法を亂し、正法の生命を縮めてゐるものがあるかも知れないと云ふことであつた。師は茲に志を立て、天竺に入り、經典律卷を得て、中華の佛教を益々光輝あらしめたいと思つた。晋の隆安三年（西紀三九

九) 慧景、道整、慧應、慧鬼等の同學と共に長安を發して長途の旅に上つた。
 ……長安より發して、西の方流沙を渡る。上に飛鳥なく、下に走獸なし、四顧茫茫これを測る所なし。たゞ日を視て東西に准じ、人骨を望んで以て、行路を標するのみ、屢々熱風惡鬼ありて、これに遇へば必ず死す。

茫茫たる沙河、草もなければ木もない、何處までもく、灰色の沙が擴がつてゐる計りである。熱風一たび吹けば、沙塵を卷いて天地晦冥、何物をも埋めずには

置かない。晴れた日、太陽を見て東西を測り、哀れな先人の呪はれた枯骨を見て道しるべとして進むだけである。十七日を費してやうやく鄯善國に到着した。

進んで于闐國に入り、子合國に轉じ、葱嶺を越えて、やうやく北天竺に至ることを得た。山には千古の雪が融けず恐ろしい毒龍がその中に住み、意に満たないことがあれば、毒風を吹いて雨や雪や沙礫を吹き飛ばす。石壁聳つこと千仞、嶮に攀ちて足を下すことが出来ない、崖に添うて手をつける處がない。今これらの嶮難を過ぎて、印度の地を踏むことを得たのは、全く佛力の冥祐に依るものと感謝された。慧應は道に死し、道整は病友の看護に中途に止まり、同友離合、追々影淋しく、小雪山に辿りついた時には慧景、慧鬼をつれてたつた三人となつた。積雪數丈、天地たゞ白皚々、偉大な自然は哀れな異郷の遊子を威壓する許りであつた。遇々山の北陰に進んだ時、寒風暴に吹き起つて雪を飛ばし、一步も足を進めることが出来ない。遂に慧景は雪に倒れた。驚いて駆けつけて介抱せんとすれ

ば、慧景は口に白沫を吹いてあえぎ乍ら云ふやう、「どうぞ私に構はんで下さい。早く此の場を去つて下さい。私はもう立つことが出来ません。まご／＼して居ればあなた迄が此處に倒れねばなりません。どうぞ早く進んで私共の目的を果して下さい」。千古の雪の中に今迄艱苦を共にして来た大切な友達を捨てゝ行くことがどうして出来よう。さりとて又遊山の旅ではない。尊い法の旅の目的がどうして捨てられようか。この時の法顯の胸中はまだことに察するに餘りがある。慧景は遂に死んだ。「法顯之を撫して悲號す」。あゝ偉大な功業よ！汝の殿堂の建立のためには幾本の尊い犠牲の柱が打ち込まれたことであらうか。

法顯は遂に目的の地に入つた。祇園精舎を尋ねては、佛陀二十五年夏坐の昔を偲び、迦維羅城に入つては、佛陀降誕の花園を訪ひ遂に王舍城に來つて、今や時移り世代り、さしにも繁華であつた摩揭陀の古都の荒れにし跡に懷舊の涙にむせび、「法身常住常在靈山」釋迦の淨土と歌はれし靈鷲山の高き姿を仰いで、如

來說法の獅子座を親しく觀奉るを得る幸福を楽しんだ。

然し、國亡びて山河あり、王舍城一體は一面に印度固有の藪に包まれて、猛獸と毒蛇の威を振ふ儘に任せてあつた。古城をめぐる五山の峰は高く、一體森々として鬼氣の迫るものがあつた。然し感激の涙に濕れた法顯には、危険は物の數ではなかつた。よしや道はなくとも、登つて、この尊い聖地の靈氣を心行くばかり吸ひたいと心躍つた。寺僧はこれを停めた。「路が甚だ險阻である。途中に黒獅子の出る危険もある。登山は止めて、法器を大切に巡遊せられたら宜からう」と親切に停めた。然し法顯は、「これ迄數萬里の山を驅け、險難を犯して入竺したのも親しく佛の御足の跡を拜する爲めである。今この聖地に來て、危険があればとて、うつせみの身をかばうて、どうしてこの多年の願を捨てられようか。苦も樂も意とするとところではない。生も死も關するところではない」抑ゆる袂を振り拂ひ、藪林を分け、山へ上つた。頂に達した時分には、日は既に落ちて、四邊は薄

暗に包まれてゐた。「噫。今や其の處へ來た。此の處こそ、靈山會上の法の庭には諸天は雲の如く、菩薩は星のやう、如來その中に坐して、一乗の妙法を御説きなされたところではないか。「如是我聞一時佛在於耆闍崛山」と幼ない五つ六つの時から何時も經典の初めに眼にし口にして來た靈鷲山ではないか。法顯、何の善業の報いあつて今この靈山に詣ることが出來たのであらうか」。法顯は世の一切、總ての事を打ち忘れて、ひたすら感激にひたり、香を焼き禮讚讀經してゐた。すると、何處からともなく、三頭の獅子が、藪を分けてのそりくと顯はれて、法顯の前に蹲つた。法顯は一心に經を誦し佛を念じて止めない。三頭の獅子は皆頭を低れ、尾を下げて、法顯の足下に伏した。法顯は手を以て、獅子の頭を摩で、云ふやう、「獅子よ、若し私を喰べよう」と云ふのならば、私が經を讀み終るを待つが善い。又私を試みよう」と云ふのならば、その必要はない、速に去るがよろしい。しばらくして獅子は音もなく靜かに皆立ち去つて仕舞つた。

かやうな豪邁な法顯も所詮は涙の人であつた。否、否、血の涸れ涙の乾いた人に、法顯のなし遂げた偉業を見ることは出来ないに相違ない。法顯は佛蹟を参拜し終り、既に離郷十二年の歳月を送つて、南印度に下り、錫蘭島に渡つた。或る日阿奴羅陀富羅の無畏山寺に参詣した。寺には大きな青玉の佛像があつた。法顯は合掌瞑目、頭を垂れて頂禮した。不圖頭を舉げて傍を見ると、一人の商人が、一本の眞白な絹の扇を佛前に捧げてゐる。その白扇を見ると、法顯の顔には見る見る感傷的な色が漂うて、はら／＼と涙がその頬を濕した。法顯も所詮は弱い人間であつた。家郷忘じ難し。白扇は法顯が魂の奥底に寸時も忘れることの出来ない遠いなつかしい故郷の扇ではないか。法顯はその自傳中に云うてゐる。

法顯漢地を去つて積年、與に交渉する、悉く異域の人、山川草木舉目、舊なし。又同行或は袂を分ち或は流亡す。影を顧みるに只己のみ、心常に悲しみを懷く、忽ち此の玉像の邊にて、商の一白絹の扇を以て供養するを見、

覺えず悽然として涙下つて目に滿つ。

情の人、法顯、故郷を去つて既に十二年、語らふべき十數人の同行者は途中に或は分れ或は死し、今や一人の友もない。顧みるに孤影淋しく、法顯ひとり旅に老いんとする。一草一木、家郷の情を傳ふるものもなく、山河大地にもなつかしい舊知がない。夕ざれば、悲しきものを、椰子の葉風の颯々と鳴りて旅情を誘ひ來れば、遊子うたゝ斷腸の思ひがある。忘れんとして忘るゝことの出来ない家郷、今その家郷の一白扇がはからずも眼に止つた。茲に白扇は家郷のすべての凝集だ。法顯も遂にその悲しみを訴へざるを得ないのである。嗚呼、この家郷忘じ難い弱い人が、法の尊嚴の自覺の下に、法の威令に促がされて、人天共に讃ふるこの偉大な業績を成し遂げたのである。編者は嘗て錫蘭に遊し日、熱帯の明月、椰子の林にかゝつて、そゞろ旅情の堪え難き夜、屢々この文を誦して勵まされ慰められ又泣かされたのであつた。

法顯はかくして往路六年を費して印度に入り、停まること六年、佛像經卷を得て、師子島から、商人の船に乗つて歸路についた。船には二百餘人の人を乗せてゐた。萬一、船の破損等のことを患へて別に小船をつけてゐた。幸に信風を得て東下したが、三日目に大風に遇ひ、船が破損して水が洩れ出した。乗組は驚きあはてゝ小船に乗り移り、多くの人々を大船に残して、索網を切つて、波にゆられて何處ともなく漂ひ去つた。商人達は恐れおのゝき、貨財の重いものは悉く海中に投じて船脚を軽くせんとした。法顯も澡罐さうくわんや君壻くんちちなどの持物を投げ込み、佛像經卷を棄てられやしまいかと、一心に佛陀を念じ、遠くかうして印度に涉り、漸やく經卷を得て歸る途中、願くば恙なかれと祈つた。ゆられくゝて大風裡にあること十三晝夜、漸やく一つの島につくことが出来た。船の修繕をして耶婆提ヤバタイに着き、更に船を代へて廣州カウシウに向つた。海路には抄賊せうの恐れと、伏石あんしやうの危険がある、幸にこれらの難に遇はないで行く中に、又大暴風の渦の中に入つた。船中の人々議して

云ふやう「船路には出家は禁物である。この出家一人のために、我々が斯うして難儀に遇はねばならぬ道理はない。この出家を海に投げ込んで、海神の怒を静めようではないか」と。法顯は一心に、念佛してゐたが、最早やこれまでと覺悟を極めてゐると、船中で法顯の信者となつた人が云ふやう、「この御出家を船から下すならば私も一緒に下すがよい。でなければ私を殺してからにせよ。この船は支那へ行くのちやが、支那の天子は佛法を信仰し出家を大切にしてお出でなされる。無謀なことをすれば訴へて出る迄ちや」。船の人々もこの一語で法顯を海に投ずることを止めた。かくて幸に難船もせず、漸やく青州サイシウに達することが出来た。時に晋シンの義熙九年ギキ(西紀四一三年)七月、長安を出でより正に十五年目であつた。

法顯、玄奘、義淨等の人々は幾多の艱苦を嘗めたけれども、遂には目的を果して、郷土に歸り時の帝王の厚き歸敬を得た。一人の成功者の裏には十人の失敗者

が隠れてゐる。我等の特に心を引かれるのは、この失敗者の悲しい事蹟である。義淨三藏は天竺に渡り、これらの人々の事蹟を調べて、『大唐西域求法高僧傳』を著はし、あはれにも勇ましい英魂を慰めた。

阿離耶跋摩アリヤバツマは新羅シラギの人である。唐の貞觀年中、長安を發して西域に向ひ、印度に入りて親しく聖跡に詣で、那蘭陀寺に停つて律を學び經典を寫してゐたが、歸志矢の如きも志を遂げることが出來ず、同地に死んだ。年は七十餘であつた。

道琳ドウリンは荊州江陵ケイシユウカウリヤウの人である。佛教が支那に傳つて既に數百年を経て居るにも拘らず、僧侶の行ひ守るべき行持を記した書籍の缺けて居ることを慨いて、海路遠く印度に入り、先づ佛陀伽耶の菩提道場に詣で、那蘭陀寺に入つて、大乘の教理を學び、竹林精舍や靈鷲山の聖蹟に參拜し、南印度に下つて密教を受け、既に

その入竺の目的も果したればと云ふので歸路につき、北に向つてカシユミールを過ぎて、烏長那國に入り加畢試國カヒサに行かれた迄は解つてゐる。が、その後の消息が絶えて仕舞つた。義淨三藏が羯茶國に居られた時、北方から來た印度の僧が、道琳らしい人が今一人の僧とつれだつて居るのを見たと言ふ話をしたが、行方が解らない。賊に捕はれて、北印度に連れ戻られたといふ噂であるといふことであつた。その時年は五十餘りであつた。

常愍ジャウヒンは并州ヘイの人である。常に念佛を稱へて往生極樂を願うた願生行者であつたが、『般若經』を萬卷から書寫して佛教の宣傳につとめた。後親しく印度に入り、如來の御足の跡を拜したいといふ志を起し、船にて遠く南洋を過ぎ、印度に着き更に船を變へて中天竺に至らうとする途中に、大暴風に遇うて、船が破損した。商人達は急いで小船に乗りうつらうと争ひ、大變な騒ぎをしたが、船主は信仰深

いものであつたから、師を呼んで早く小船に乗り移るやうに勧めたけれども、師は動かない。「どうぞ他の人々を一人も残らず乗せるやうにして貰ひたい。小船の量にも限りがあればさうく乗れるものでないから、私は後へ残らうから、急いで小船を出して、一緒に沈没しないやうにして頂きたい」と承知せず、合掌して西方に向ひ、念佛を申して、船と共に沈んだ。年若な弟子が一人ついてゐたが、これも師と共に永久に海底に沈んだ。

斯ういふ人々の努力に依つて、釋尊の一大藏經は完全に支那に移し植ゑられた。馬に積んで七駄半、數千卷の經典が印度數千年間の文化を盛つて、今日世界の寶庫として支那日本の佛教徒の所有であるといふことは我等の幸福であり誇りであり、また歡喜である。古より我等の祖先が佛の教に救はれ、今日我等が歡喜よろこびの生活を得、此の後、我等の子孫が永久にこの大法に救はれ行く事は、皆これらの

人々の不惜身命の求法の賜であると曰はねばならない。我等はこれらの人々の精神に感激して我等の今後の生活の指導を得るのである。

年若な青年よ、おまへは求めて飽くことを知らない。そのおまへの求め心に依つていつも文化の種子は、向ふの岸からこちらの岸へ移し植ゑられ、新しい文化の花を開く。「入竺求法僧」といふ青年「佛教徒」が成し遂げた偉業を思ふ時、我等は深い感激に堪へないのである。

三、印度の道に殉ぜし人々

求めた法が、自分の生命いのちとなつた時に、それは喜びであると共に、また力である。この力は嚴肅な命令として、その人の生活を左右し、時には肉の生命いのちを古靴でも棄てる様に棄てしめる。

青年「佛教徒」が、身を棄てて法を求めて行く中に、法は「佛教徒」の全分の精神を占領して、その精神の中に嚴肅な威令を布く。法は青年「佛教徒」の生活の指導しだうとなり、光となり、力となり、生命いのちとなる。それであるから悪魔の黒い手が無道にもこの法の上に下らんとする時に、この青年が立ち上つて、その肉團を以て、悪魔の黒手と戦ひ、火花を散すは云ふまでもないことである。我等は既に青年「佛教徒」が支那「入竺求法僧」として、求道の旅路をつづけた跡を見た。この青年がその求道の旅から得た法の喜びに胸躍るすがたは今の所要ではない。天の一方か

ら黒雲が捲き起つて、輝やく平和の法の園に群れゐる羊の群に魔の手が下らんとする時に、いかに青年が、その血と肉とを捧げて、法の爲めに戦ふか。我等はこれを印度支那日本の三國に亙つて、三千年の彼の長い生涯に見て行かねばならぬ。

一、目連尊者

目連尊者は釋尊十大弟子の一人であり、舍利弗尊者と相並んで、上足の二大弟子として教團内外の尊信を受けて居られた。神通を以て聞え、偉大な強い意志を以て、自分の悪を碎いてすくむ徳行家であつた。

釋尊が古稀の年を迎へ給うて數年後、佛の教がしつかり印度の地に根を下ろして動かすことの出来ない勢力を上下に張り、提婆も倒れて、内から來る憂は無くなり、阿闍世王も自分の罪惡を懺悔して佛に歸し、我れは無根の信を得た、私の如き者には勿體ない信仰を得たと喜び、一きは佛の光が輝やき渡つた時であつた。

裸形外道は佛教の勢の盛んなるを嫉み、機會を見て、打撃を與へたいと思つてゐた。彼等は愚かしくも、佛教内の頭領株の人々を倒せば、佛教の大木を倒しうるものと思つて來た。かくて彼等は目連尊者をつけねらふこととなつた。

外道にやとはれた深浪人達は、伊師耆利山イシギリさんの中腹に禪定を樂しむ我が尊者を襲うた。神通に勝れた尊者は、彼等の手には乗らない。二度目も失敗した惡漢共は更に大舉して三度尊者を襲うた。尊者はこの執拗な襲撃に自己の業報を觀念して、彼等の爲す儘に任せられた。瓦石は飛んで雨と降つた。皮は破れ肉は裂け骨は碎けて尊者はその淺間布もくろい骸を残して、ほとりなき涅槃の世界に入られた。

外道のこの成功は決して彼等に教の上の勝利を與ふるものではない。尊者の死は、王舍城の人々をして益々外道を惡ましめ、佛の教に歸服せしめた。今や老境に入れる釋尊の光は益々その輝きを増して全印度に輝やき渡つた。

二、蓮華色比丘尼

蓮華色レンゲシキ比丘尼は、比丘尼教團に於ける目連尊者であつて、神通第一を以て鳴り釋尊の重んじ給ふ所であつた。

釋尊の晩年、提婆ダイバは師に乖ないていろ／＼のてだてを運めぐらして釋尊を害せんと計つた。然し總ての刃は釋尊の御身近くに至れば、華と化して、却つて佛陀の威徳を増す計りであつた。阿闍世王も心中の苦悶に堪えずして佛陀に歸依し、惡友と手を絶つた。提婆は企ては破れる、外護の國王には見放される。くしやく／＼して悶えてゐたが、或る日も王宮へ訪れて玄關拂おんくひを食ひ、怏々として歸らうとする。蓮華色比丘尼が王宮の門から出て來るのに遇つた。提婆の餘憤は比丘尼の上に走つた。「我が敵に阿附して王者に讒訴する惡るき尼奴」と拳を擧げて打ち掛れば、「世尊の御身内のあなたを何の恨みがあつて惡し様に申しませうぞ」と言ひ譯すれども聞かずに、音に聞ゆる無双の大力で毆なぐつた。死なんに垂たとした比丘尼は漸やく

に精舎に歸り、自分の卒ゐて居る比丘尼達を集めて最後の教を垂れた。「姉妹よ、命あるものは必ず死に至るものである。世のすべてのものはみな無常である。随つて我といふものはない。姉妹は勤めて善を修めて寂かなさとりに入らねばならぬ。私はいま提婆尊者に依つて涅槃に入るであらう」と。

聖者には怒りが無い。すべてはみな我がさとの爲めである。富樓那尊者が故郷の地スツバラカの濱邊に傳道を思ひ立たれた時であつた。その去るに臨んで、釋尊は尋ね給ふ様、「富樓那よ、輸留那の民は兇暴である。もし汝の正しい法の宣傳を怒つて誹謗したら何とするか」。「世尊、私は輸留那の人々が親切であつて打つべき私を打たないで誹る丈けにして呉れることを感謝します」。「富樓那よ、若し彼等が汝を打つて殺さば何と思ふか」。「世尊、私はその人々に依つて涅槃に入ることの出来ることを感謝いたします」と、誹謗も追放も鞭打も襲撃もみな聖者に取つては感謝である。

三、摩訶那摩

摩訶那摩は釋尊の従弟で、阿那律尊者の兄である。釋尊、釋尊の異母弟難陀尊者、釋尊の實子羅睺羅尊者と引きつゞいて出家せられたので、同じく釋尊の従弟である跋提が迦維羅衛城の王位に即き、續いて摩訶那摩が位を襲うたのである。彼は非常に信仰厚い王者として正法に依つて政治を布き、釋尊が故郷へ歸られるといつても、林に世尊を訪うて法話を聞き魂を研いて行くことを楽しみとしてゐた。

迦維羅衛城は小さな國であつた。隣強の喬薩羅は常に毒牙を鋭いで、隙をねらつてゐた。幸に喬薩羅の國王波斯匿は熱心な佛教信者であつたから、その一代は侵掠を念はず、迦維羅衛城も平和を楽しむことが出来たが、然し四圍の大勢は何ともすることが出来なかつた。毘瑠璃王が王位を篡奪するや、王は直に近隣の小國を併呑する運動を起した。迦維羅衛城もその運命をになはせられた。それに毘

瑠璃王は迦維羅衛の釋迦族に對して深恨があつた。種族の尊貴を誇る釋迦族の人達に卑しい素性の出の太子として耻辱を受けてゐた。王は遂に兵を迦維羅衛城に向けた。歩騎の軍が肅々として道を東に取つて進んだ。とある街道の道傍に一本のとげくした枯木が淋しさうに立つてゐた。その下に一人の老いたる沙門が坐つてゐた。毘瑠璃王はこれを見つけて近付いて見れば、それは大聖釋尊であつた。王は問ひ奉つた。「世尊、世尊は何故にこの様な枯木の下に安坐してゐられるのでありますか」。大王よ、親族の蔭は涼しい。王は世尊の御心持を推察して兵を歸した。

この様なことが三度あつた。然し毘瑠璃王の征服欲と復讐心とは何者もこれをとどめることが出来なかつた。王は四度兵を進めた。釋尊もこの度は道傍の樹の下に姿を示し給はなんだ。それは業だ。銘々の前生の行爲の報いだ。何物もさえざりとどめることの出来ない恐ろしい應報だ。佛の力もこの理法を亂ることは出

來なかつた。喬薩羅の兵は迦維羅衛城を遠卷にして攻め立てた。釋氏はもと弓術に於て天下に聞えた種族である。武器を取つて立てば、小なりと雖も、喬薩羅の大軍を引き受けて戦ふことはそんなに困難でもなかつた。然し王の摩訶那摩始め、多くの闘士は皆佛に従つて五戒を守る清信士であつた。戦はんか、殺す勿れの制戒を破らねばならぬ。武器を捨てんか、毘瑠璃王の兵は如何なる殘虐を行ふかも知れぬ。然し乍ら種族は茲に悉く滅亡する悲運に遇うても、種族全體良心の命する所に依つて道に殉じよう。彼等は總て武器を捨て、喬薩羅の兵のなす儘に任せた。愈々殺戮が行はれた時、摩訶那摩は毘瑠璃王に願ひ出た。「どうか私の一身を犠牲にして城民を助けて頂きたい。せめて、私が池中に沈んでゐる間、城の人人が城を出離れることを許して貰ひたい」。毘瑠璃王はこの願を許した。摩訶那摩は監視の人々の眼の前にて池に入つた。城民は自由に免れ出た。摩訶那摩はいつ迄立つても浮び上らない。怪んで池中を採つた所、摩訶那摩は自分の髪を解いて

池の中に根を張つた木にくくりつけて沈んでゐた。

この壯烈な摩訶那摩の死はやがて亦新迦維羅衛城建設の礎石となつた。王の道と種族に殉じた死と城民の法を中心とした死とは迦維羅衛城の永遠の燈となり、釋迦族の生命を不死に入らしめた。

四、サーマヅテ

サーマヅテは喬賞彌市カウサムビーの瞿師多長者、世尊に歸依して園林を御寄附申上げた有名な信者である長者の養女であつて選ばれて優顛王の妃となつた。第一皇后がマーガンデヤー、第二皇后がサーマヅテであつた。マーガンデヤーは釋尊に恨を持ち、王后に選ばれて、いつかは復讐の機會があらうと折を待つてゐた。世尊は瞿師多長者等に迎へられて、舍衛城祇園精舍から喬賞彌市に留錫し給うた。これを聞いたマーガンデヤーは非常に喜んで時こそ來れと惡漢をやとつて世尊に

對するいろいろの誹謗を放たしめた。然し誹謗の矢はいつもの様に放つものを傷つける許りであつた。サーマヅテの腰元に跛足ちんぱではあるが非常な伶俐な鬱多羅といふものがあつた。彼の女は主人の使に市にて花を求め、不圖した縁で、世尊の法話を聽聞し、王宮に還つて、これを片言隻語の間違もなく皇后に復演した。サーマヅテは豫て養父の長者から世尊のことを聞いて居り、今又その法話を聽聞したので非常な歡びを得て秘かに佛陀を信するものとなつた。然し身は王宮の深窓にあつて自由に參詣も出來ないので、鬱多羅が世尊の法話を承つて來ては細話をする役目を帯びた。この様子を見て取つたマーガンデヤーは、サーマヅテの後宮と沙門達との間に不義ある様に言ひ觸らし、しつこく王に讒訴した。王は幾度も重なる讒訴に遂に動かされて、大に怒り、毒矢を番へてサーマヅテを呼ばしめた。只ならぬ急な使にサーマヅテは事の始末を察して、靜かに腰元達を教へた。「騒いではならぬ。恨を抱いてはならぬ。佛の御力に依つて愛の心

をたゞへて行かねばならぬ」と。

激怒した王は妃を見て矢を放たうとするけれども、愛の心に立つ矢はない、矢はどうしても絃を放れぬ。王の手は震ひおのゝき膏汗が額ににぢみ出た。王は遂に兜を脱いで、サーマヅテイーの許容を乞うた。教の如く矢を大地に向けると矢はたやすく絃を放れた。王はこの不思議に驚いて、自分の謂れない疑と嫉妬を耻ぢ、爾來サーマヅテイー及び其の他の者が、自由に佛陀とその教團へ參詣することを許した。サーマヅテイーはこの許可を喜び、親しく世尊の教を承け、日々沙門を後宮に迎へて供養し、安居の終りに阿難尊者に五百領の衣服を寄進したこともあつた。

マーガンデヤーの恨は今や轉じてサーマヅテイーの上に掛つた。幾度の企ても皆失敗したので、遂に恐ろしい最後の手段に出た。王の不在の時、身内のものをかたらうて、サーマヅテイーの後宮を圍み、四方から火を放つた。不意の出來事

に度を失うた腰元達を勵まして、サーマヅテイーは靜かに化粧し佛のあます方に向つて三寶歸依の偈を歌ひ、諸行無常、諸法無我の理を憶念し、更に腰元達に向ひ、「決して恨を抱いてはならぬ。敵と思つてはならぬ。誤れる人を憐れみ愛して行かねばならぬ。久遠の昔から積み重ねて來た業障を離れて、今天上の世界に生れて、やがては涅槃に入るのも、この人達の機縁があつたからと喜ばねばならぬ」と誨へ、慈念三昧に浸つて、火中の死を遂げた。世尊はこれを傷んで、後に、鬱多羅女は記憶勝れて多聞第一であつた、サーマヅテイーは慈心第一であつたと賞讃なされた。

道の死は寶玉である。わけてもサーマヅテイーのかゝる靜かな死は、美しい碧瑠璃に比ぶべきものではあるまいか。

五、迦那提婆尊者

尊者は西紀二世紀、南印度に生れて、龍樹菩薩の弟子となられた。師の精舎へ來つて案内を請ふと、その訪問の用事を聞かれた。御弟子にして頂きたい爲めに上りましたと取次を頼めば、満々と水を湛えた鐵鉢を示された。針を取つてその鉢の中に投げ込む。これを見て龍樹菩薩は引いて弟子とせられた。水を湛えた鉢は、菩薩が自分の智慧が深厚にして計り難いといふことを示されたものであり、尊者が針を投げ込んだのは、その深い智慧をも鋭く極め盡さうといふ意志の表示であつた。爾來尊者は龍樹菩薩に従つて大乘佛教の至奥を極め、船若皆空の教劍を提げて、當時の宗教界思想界の邪見と迷信とに挑戦した。

尊者は意志の強い斷行の人であつた。また龍樹菩薩に遇はない先、郷土に大自在天の神像があつた。全部鍍金できら／＼ときらめき、水晶の玉眼が輝き渡つてゐるので、人々は恐れをなして、見る者の眼はつぶれ、失神百日に及ぶと言ひ慣はしてゐた。尊者はこれを見んと欲し、止むる祠主の辭も退けて黄金像の前に立つ

た。人々は驚き怖れ乍らも尊者の後について來た。思ひなしか、輝く眼が動いてはつたと睨んだ。尊者は聲を高らげて云ふよう、「何といふ小つぼけな神様であらう。神は威靈を以て人を伏し、智徳を以て感せしめねばならぬ筈である。然るにこの神様は身にはきらく／＼する黄金を用ひて得意で居り水晶の眼玉を動かして人を睨まうとしてゐる。これはまことの神の所爲ではない」と、梯子はしを神像に掛けてその眼玉を鑿り抜いた。驚き怖れる人々をさととして云ふよう、「私は神を輕んじてこの様なことをしたのではない。神のまことの意が解つたからだ。神は形ではないからだ」翌日供物を以て天祠に參詣すると一夜の中に黄金像は肉の姿となり、左の眼は抜かれた儘に凹んでゐた。供物を受けた神は云ふ様、「私はおまへの施物は受けた。猶この上の施が得たい」尊者は神の意を知つて、自分の左の眼を抉り抜いて奉つた。爾來、尊者は迦那提婆即ち片目の提婆と呼ばるゝに至つた。

かういふ人であるから、機鋒頗る鋭どく異教の論議を破却し、何等假藉する所

なく時の迷信を斥けた。法論は印度の一名物である。王侯や大臣市民の居並ぶ晴の場に論議を戦はして、勝てばその地に布教の立場を得、破れた方は今迄の歸依を失ふやうになるのである。尊者は各地に轉戦して勝利を得た。或る時、尊者はすつと恒河の上流に遡つて、恒河の水門と曰はれる地方に行かれた。茲は今迄山脈の間を走つてゐた恒河が初めて平野に出た所で、三町程の廣さの急湍が急に廣がつて十町程の幅となり、紫爛碧浪洋々として盡くる所を知らない様な廣々とした所である。福水と呼ばれて、恒河に水浴するものは天に生ると曰はれてゐる中でも、この場所は特別に尊ばれ、人々は遠くから來て、水に入り波を揚げ流を激せしめて、死者の冥福を祈り得たつもりで居り、水中に死すれば生天するといふ迷信に依つて、良い日と定められた時に投水自殺するものも多かつた。尊者はこれを見られた。直ぐと多勢の水浴者の間に交られて水に入られた。女も居る男も居る、年寄りもあれば子供も居る、多くの婆羅門も居る。みなが波を揚げ流れを

激して狂態を盡してゐる。たゞ尊者丈け一人靜かにして頸をうなだれて波を揚げないでじつとしてゐられる。婆羅門達は尊者の様子を見て氣の毒に思ひ、「お前は何故そんなに靜かに水に入つてゐるのか」と尋ねた。尊者云ふやう、「私は遠く南天竺から來たものである。私の兩親は遠い郷里で飢で苦しんでゐられるから、この福水に浴して、たすけたいと思つてゐるのぢや」。「それは愚かぢや、南天竺は何千里海山を隔てゝ遠い所ぢや、慈で水に浴して波を揚げて、どうして兩親の飢を救ふことが出來よう。それは背行して歩進を求め、木に依つて魚を求め様とするものぢや」尊者は聲を勵まして曰はれた。「罪を犯した亡靈が、この福水に浴みする力で救はれるものならば、遠いと曰つてもこの世の事ぢや、現に生きてゐるものが助らない筈はない」この反語は婆羅門達に反省を與へて、多くの人達が正道に歸した。

龍樹菩薩は衣鉢を尊者に傳へて遷化せられた。尊者は師教の重きを思ふと共に

益々熱心に破邪顯正の戦をつゞけられた。當時尊者の郷里南天竺は異教の盛んな所であつた。尊者の鋒先は遂に南の郷里に向つた。尊者は思ふやう。「樹は幹を切らなければ枝は盡きない。王を押へて仕舞はなければ南印度の教化は徹底しない」丁度その時國王は宿衛の士を探してゐたので、尊者はその募集に應じて衛士となり、勤勉にしてゐるので部下のものもその徳に浴し、成績が顯はれて國王の眼にとまつた。王はその祿を受けず、錢を求めないと云ふのを聞いて不思議に思ひ、召して問ふと、我れは一切超人であると答へる。驚いてその理由を聞きたゞして居る中に、だん／＼尊者の掌中に掴まれて、遂に異教者との對論を許す様になつた。尊者は非常に喜んで、一切諸聖中、佛第一、一切諸法中佛法第一、一切福田中僧伽第一といふ三寶最勝説を押し立て、この立場を破るものがあれば頭を與へようと聲明した。然し印度第一の論客の前には齒向ふ敵はなかつた。八方の諸論士と論戦すること三ヶ月に及び、悉くこれを服して、深くその地に佛種を植ゑつ

けた。

尊者は既に折伏の偉業を果したので、王家の供養の下に悠々顯正の業につとめて居られた。或る日林に入つて、自著『百論』の筆を取つて居られた。弟子達はあちらこちらと分れて樹下に安禪してゐる。今しも尊者は筆を擱いて立ち上り林の中に冥想の歩みを連んで居られると、忍び寄つた外道、刃を取つて尊者の腹をぐさりと突きさした。「汝は口を以て我が師を破つた。我れは刃を以て汝の腹を破る」尊者は絶えなんとする呼吸の間から曰はれた。「あの樹の下に私の衣があるから、それを著てこの道を山へ上つて逃げるが善い。私の弟子の中にはまださと切り切らない者もあるから、お前に對して復讐をするだらう。行け去れよ、身體も名譽もお前にはまだ惜しからう。聽てはこの大きな患の本を絶たねばならない」弟子は歸つて来て、この様子に驚き呆れ、或者は走つて刺客を追撃しようとした。「待てしばし。諸法本來一切空、我もなければ我がものもない。刃は只恐ろしい應報を

切つたまでだ。うろたへて道を壊るな。英魂、血を郷土の林に彩つて遠く涅槃の城に去つた。

六、師子尊者

「毘瑠璃王は七萬七千の諸の得道の人を殺す。月氏國の大族王は率都婆を滅毀し、僧伽藍を廢すること凡そ一千六百餘處、乃至大地震動して無間地獄に墮ちにき。伽盧釋迦王は釋種九千九百九十九萬人を生け取りて並べ従へて殺戮す。積屍莽くさむらの如く、流血池を成す。弗沙彌多羅王は四兵を起して五天を回らし、僧侶を殺し寺塔を燒く。設賞迦王は佛法を毀壞す。訖利多王は僧徒を斥逐す。」

これは『行敏訴狀御會通』の文である。流石は迫害と追放とあらゆる法難に出遇うた上行菩薩の化身日蓮上人。印度の佛教迫害史を叙して大體に於て誤りのないのは偉いものであると曰はねばならぬ。然し今日印度の佛教史は昔よりは少しく

明らかになつて來た。佛教はその三千年の長い歴史の間に於て、大體そんなに迫害を受けたことはないのであるが、印度に於ては四回を數へることが出来る。

第一、紀元前二世紀弗沙密多羅王フシヤミタラ (Puspanitra) 阿育王アユカの孔雀王朝を倒して、中印度を奪うた時、華子城を中心とする佛教を迫害して、寺塔八百を毀ち、五百の阿羅漢南山に逃るといふ事があつた。

第二、西紀三世紀の始め、カシユミールに於て訖利多キリダ (Kirta) 種の王が佛教を迫害して、僧尼を殺戮したが、ヘーマンタラ王外道の王を滅ぼして、佛教を回復した。

第三、西紀六世紀の始め、北方サーガラの王、摩醯邏炬羅ミヒラクラ (Mihira Kura) カシユミール、ガンダーラ地方の佛教を迫害し、千六百餘の伽藍を破壊した。

第四、西紀七世紀、設賞迦王セヤンカ (Sakanka) が中印度の佛教の根絶を期して大迫害をなし、佛陀伽耶の菩提樹を抜いて燒き拂ひ、華子城の佛足石を毀して、寺塔を

破り、僧尼を逐うた。設賞迦王は今のベンゴール州に勢力を張り、廣く全印度に渡つて佛教の破滅を計つた。王に焼かれた菩提樹は磨揭陀國の補刺拏伐摩王、これを聞いて嘆き深く、牛乳を殘根に注いで蘇らし、戒日王、設賞迦を滅ぼして、佛教を回復した。

『行敏訴狀御會通』の毘瑠璃王と毘盧釋迦王とは同人であつて、波斯匿王の實子である。釋迦族を滅した恐ろしい人間であるが、佛教の迫害者と云ふは當らない。月氏國の大族王とは第三の摩醯邏炬羅のこと、弗沙彌多羅は第一の迫害を指し、設賞迦王は第四、訖利多王は第二の迫害を云ふのである。

これらの佛教迫害史に於て、時の佛教の僧尼がいかなる態度を取つたかは、時代が遠いのと、歴史書といふものゝなかつた印度のことであるから、全く知ることは出来ない。たゞ次の二つの事は明かに斷言することが出来るやうに思はれる。

第一に印度の佛教——支那の佛教もさうであるが、その佛教團體が家門的發達

を遂げないで、僧苑的敎團であつた爲めに、團體の結合力が乏しく、従つて法難に對して團體としての抗争がない。個人的に道に殉じ、後の敎法興立の礎石となつた人はあるが、日本に於ける石山戦争の如き、時の迫害に對して戰つて出たこととはない。それで大體は時の權勢が強ゆる武力の壓迫に對しては、ゴム玉の様にへこみ、逃げて銳鋒を避けるといふ方であつた。

第二に、宗教は決して迫害で亡びるものではない。否、迫害があれば却つて勢を盛り返してやつて來るものである。現に印度四回の法難に於てはさうであつた。殊に興味深く感ずることは、第一回の弗沙密多羅王佛教迫害の時、北方サーガラを領する希臘王、メナンデルが、佛教興立の旗を押し立て、華子城の聖地回復軍を東に送つたことである。不幸にして、この擧は思ふ様に成功せなかつたけれども、希臘人メナンデルに宿つた佛の光が、この聖軍を起させたといふことは心持ち善く感ぜられるのである。

佛教は迫害に依つては亡びない。然らば何で、佛教はその生産地の印度に亡びたか。これは今日猶我等に残された問題であるが、印度の古典『伽耶富蘭那』の記さる所は幾分眞實を示してゐるであらうと思はれる。

以上述ぶるが如く、印度の佛教史に於てその法難の時に、いかなる人がいかなる殉教の血を注いだかは知ることが出来ない。只、茲に一人、第二の法難の時に、その血を法に捧げた人を擧げることが出来る。それは、我が師子尊者である。

師子尊者は、付法藏傳二十四祖中の第二十二番目の祖師であつて、生れは中印度、カシユミールに行いて鶴勒那尊者について嗣法し、師匠の死なれる時、我が死後五十年にして法難があるであらうから、善く法を護持せよと豫言せられて教の如く善く教法を護り、年経て弟子の婆舍斯多を得、如來の正法眼藏を付屬し、「私の師匠の懸記のやうに、久しからずして、法難起り、私の身上に難儀が起るであらう。どうぞ汝は今から他國へ難を避けて、法燈を消やさない様にせよ」と

命じ、婆舍斯多を南天竺につかはし、尊者は心靜かに時の來るを待つて居られた。

外道の徒に、摩目多と都落遮といふものがあつた。王家に對して亂を計り、一種の政治的革命を企てゐたが、愈々事を擧げんとする時、萬一失敗の場合には佛教側に罪を被せようといふ心から、沙門のすがたをして王家に忍び入つた。事が顯はれて果して佛教側に嫌疑が加はり、王は恐ろしい誤解から烈火の様に怒り、今迄國內に相當に保護もし尊信もしてゐたのに、恩を仇に返すとは憎くい奴等と、尊者の許へ馳せて、その頸を刎ねんとした。挨拶が終つて、王は尊者に問うた。

「師は五蘊皆空の理を體驗してゐられますか。」

「仰せの通り、五蘊皆空の理を體驗してゐます。」

「生死を御離れになりましたか。」

「仰せの通り、生死の垣は越して居ります。」

「既に生死の垣を越して居られますならば、私に必要なあなたの頸を下され

るでせうか。」

「この五體が私の身體ではないのでありますから、この腐つた頸が御入用ならば隨意に御持ち下さりませ。」

かくして王は尊者の頸を刎ねた。引きつゞいて、寺塔の廢棄、僧尼の追放が行はれた。何といふ徹底した態度であらう。熱狂して死の谷へ飛び込むのは易い、かうした靜かな意識のもとに頸を與へることは、尊者の様な徹底したさとり境地に入つたものでなければ能くすることの出来ないものである。正受老人は八十歳にして猶、生死の一關を突破するために苦勞して、山林の夜を坐禪して、徹宵狼の熱い呼吸を喉に感じて過された。最後の一關の突破は聖者の最も苦心せられた處である。尊者は徹底的の無抵抗主義にて、この一關を容易と透過せられたのであつた。私は次にこれと相似た無抵抗を突きつめたドラマチックな死を語らねばならない。

七、ケラニヤ僧正

佛教が錫蘭島に傳はつたのは紀元前三世紀の初頭であつて、阿育王の王子摩晒陀ダと其の妹僧伽密多サンガミッタの傳道に依り、鬼神が住むと曰はれた島が暫くの中に印度本土の高い文化にはぐくまれ、佛の光に浴することとなつた。それから約百七八十年を経て、錫蘭の佛教は我等に一つの美しい物語を残した。

島の中央部の山地、アヌラダプラに都した王統が、分れて島の南端、印度洋の浪碎くる突端に都城を築いたのは紀元前二世紀であり、その三代の君主をカルヤチツサニ帝須と云ふ。カルヤニは美しいといふ意味で、その都も、都に沿うて流るる河も同じ名のカルヤニと呼ばれ、後にはなまつてケラニヤと稱せらるゝに至つた。

この地の教團に一人の高僧が居られた。實名は恐らく傳はらなかつたのではあ

らう、ケラニヤに住む故に、ケラニヤ僧正の名を呼ばれてゐた。帝須王は敬虔な佛教信者であり、日々宮廷に多くの比丘を供養して居られたが、わけでもケラニヤ僧正に歸依深く、私室に引いて王妃と共に施食供養するを常として居られた。供養の幾年は平安に過ぎた。されどこの間に悪魔は秘かに宮廷の奥深く忍び込み、悲劇の種子を蒔いてゐた。年若な美しい王妃は、その花の顔が生む禍の犠牲として、王弟の道ならぬ戀の的となり、そのやるせない思ひにほだされて、遂に人目を忍んではかない逢瀬を楽しむこととなつた。椰子樹の蔭や、マンゴの實る林の奥に、若い二人は甘い私語を交してゐた。ちらとこのことを耳にした王は、二人の間を割いた。法に依つて心の寛やかな王は殘虐な事を好まなんだ。たゞ王弟を宮門の外へ放逐したまでこの事を濟まさうとした。王の心は美しい妃に充分の未練を抱いてゐた。王妃は之の儘に罪を問はれずゐた。塞がれた水は勢を増して流れ、割かれた戀は烈しさを加へる。王弟は追放せられて、愈々戀の火に身を焦した。

を焦した。

王弟は遂に一計を案じ出し、心利く手下の男を比丘に装はせ、黄ない衣の奥に、燃ゆる思を秘めた艶書を忍ばせ、鉢を手にして宮城の門口にケラニヤ僧正を待たせた。丁度比丘の托鉢の時刻、午前十一時、いつもの様に僧正は、木蘭色の衣も軽く宮城に赴き、王と王妃に迎へられて、奥の一室に通られた。賈の沙門も僧正の方では王の供養を受くる比丘であらうと思ひ、王家の方では僧正の供をした比丘と考へ、別に怪まれもせず、その一室に通じ、僧正と一緒に、王の懇ろな供養を受けた。聖き沈黙を尊む比丘の供養の席には、要らぬ語は語れない。御蔭で密使はその秘密を發かれず、隙を見て、王妃に、書を手渡したいと心を碎いた。供養は終つた。僧正は御禮の法話を濟まされた。然し猶機會は與へられない。王と王妃に送られて二人は玄關へと足を歩んだ。密使は策の施すところなく、絶對絶命、僥倖をめざして、貝多羅葉に書き收めた艶書を、人知れず、王妃の前にそ

つと落した。静かな宮庭の日盛りには、牡丹の花のくづるゝよりも微かな音であつたであらうが、耳敏くばつたりと落ちる音を聞いて、王の眼は直ぐとその艶書を拾うた。王は二人の比丘を送り出し、自分の室へ歸つて、開いて見て、烈火の様に憤つた。宛名は王妃。差出人はケラニヤ僧正、密よりも甘き戀のことばに、破戒の罪の怖れ氣もなく、弱いあはれな心のうつたへ、手跡もまがふ方なき僧正の手の癖。王には前後のわきまへも打ち忘れ、怒りに震ひ、兵を精舎に送つて、僧正を捕へしめた。徳にいつはる賣主の坊主、日頃の敬を裏切つて、最愛の妻に戀を寄する悪くき奴、大釜に油を湛えて煮殺しの嚴罰。僧正は一言の辯明もしない。觀念の眼を閉ぢて、刑場の用意が出来るまで暫しの露の命を、獄屋に投げ込まれた。僧正微動も起らない。眞劔が心の底まで喰ひ込んで来た。今こそ、向上の最後の一關を突破する時が来た。絶好の機會が與へられた。大釜の油の沸り立つ迄の束の間の時、この時が永遠の運命を宰る大切な時である。悟るか迷ふか、永へ

の解脱か、永劫の輪廻か、命の瀬戸側、僧正は必死無二の心觀、最後の止觀に踏み込まれた。一大事因縁のためには恩怨共に忘れて、たゞ直入の一路、光を戀うて、まつしぐらに前進。我が身を焼く釜は沸々と漸やくにたぎり来る。寂然として觀念の眼を閉ぢ、生死の秘密に突進する一比丘、何といふ眞劔な絶頂であらう。苦しい緊張であらう。果然迷雲遂に切れて、眞如の月は輝やき出した。僧正は今や到彼岸の人となつて悠々と沸り立つ油鑊の中に入られた。其の時僧正の口を洩れ出したものが九十八首の勸道の偈、後には『鼎鑊上の偈』と呼ばれるゝに至つた。

象王の如く歩み運び、

美しき腕、龍帝のごとく、

善きを喜び徳に住み給ふ楞伽ランカの王よ、

忿いかりと憍おこりを離れて四方よもを得よ。

佛國土の建設者

すべてのものに敬はれ給ふ慈悲のすまゐ、
解脱のいづみ、おほ空のみつる日、
知らるべきを知り盡し給へる、
上なきみ佛をおがめ。

初利の天界へ互せるきざはし、
輪廻の海を越ゆる船、
怖れを離るゝやはらぎの道、
み佛の法に歸命せよ。

量りなき大いなる福田たぐでん、

淨き心にて施さば、
勝れし果報を得べし。
み佛の讚へ給ふ僧伽を禮せよ。

三界のまよへるもの
この三寶の光に依りて
さとりを得べし。
とはに三寶を崇めよ。

わだつみの恐ろしき雄浪の花が
岸邊に寄れば碎け散ること、
死の海にて人々、

殉 教 者

佛國土の建設者

ほろびに行く。

偉いある光あるも、とほしびの、

風神に吹かれて消ゆること、

力あるものも

死の風にはろぶ。

見よ、大海を衣とし、

地を覆ひ、榮華のいづみなる、

美しき辯才天女も

ひとり死にゆく。

老を武器として死の神

刹那に迫る。

何故のねむりよ、

なほざりならざれ。

得難き人の身を得て

悪しきを離れ

さとりにならざる道を知りて

つとめざらめや。

九十八首、辯解もなければ恨みもない。悉く無我の勸道である。誰か云ふ徹底の無抵抗はトルストイの主張と。これを己れに取るものはみなこの境地に入る。

八、シユリー・サムガボーデ

錫蘭に於ける一つの尊い死を紹介した私は、ついでに同じい島の一人の聖王について語ねらばならない。

サムガチツサとサムガボーデとゴータバヤはお互に従弟同志であつた。子供のおり、野遊びをして小さな橋にかゝると、靴音を聞いた橋下の老乞食、暫し耳を傾けてゐて、「オ、この橋は今二人の王者を載せてゐるわい」と曰つた。サムガボーデには一人の叔父さんが沙門となつてゐた。善く寺へ詣でるは尊い御話をきき、或る日も跪坐して法を聞くと、たまらなく有難い。王者になるより、聖蹟の巡禮が何れ丈か仕合せであらうと思はれた。然し王族の生れなので、都に出て仕官せねばならないので三人の兄弟は携へて王宮に行き、それ／＼高い位を與へられた。サムガチツサとゴータバヤは心黒く、いつそ王をばらして位を取らう

と覺悟した。それが計劃通りに行はれて、サムガチツサは位に登つた。サムガボーデはさうした取る取られるといふ世の有様が譯もなく悲しまれて、善く宮廷を離れては精舎に入り、金色の塔を拜し、花を捧げて時を過いた。人民は位を奪うて王となつたサムガチツサを憎んでこれを毒殺した。人民は静かな敬虔なサムガボーデの徳を慕うて、厭がる王子を無理に位に即かせた。それは西紀前二百四十二年であつた。

サムガボーデは行ひ正しく、慈け深く國を治めた。水路を開き、貯水池を設けて人民の爲めを計つた。人々は讃へてシユリーサムガボーデ即ち聖なるサムガボーデと呼んだ。この王の治世にも猶、災は起つた。それは旱魃が續いて、飢饉と疫病と並び起つたことである。王は天下に先ちて憂ひ、天下に先ちて苦しみ、精舎に詣でて、塔前に平伏し、祈願を籠めた、「天よ願くば大雨を降せ。然らずんば再び地より立たないであらう。」聖王の志は天の嘉する所となつて、白銀のやうな

雨が豊かに降つた。傳説はこれを次の物語に編んでゐる。南印度から全身赭色の鬼が來た。日夜に多數の人民が取り殺された。恐ろしい日が長く續いた。王はこれを憂ひて、林に鬼に遇うた。流石の鬼も聖王の德に刃向ふことは出來ない。ぢりぢり後へ押される。王は云ふやう、「我が肉を喰べよ、人民を害するな、この國を去れよ。」我が肉を喰べよと曰はれても、鬼の齒は德の上には立たない。依つて退散を約して、その代り鬼デーブルマンス祭を毎年行ふやうにと願うた。早速行はれた鬼祭に依つて、鬼神も満足して南印度に退いた。今日錫蘭に行はれて居る鬼祭は實にその名残である。

聖王の德は益々輝いた。人民は佛の様にこれを崇めた。その時將軍の職にあつたゴータバヤは王の名聲を嫉んで、秘かに機會をねらうてゐた。王は八戒を守る關係上死刑を廢した。總ての殺生を禁じた。刑罰は餘りに輕きに過ぎた。その爲めに犯罪が増して、人民の間に不平があつた。この機を捕へたゴータバヤは軍を

進めて都城を圍んだ。王は自分の爲めに生命をおとすものゝあることを恐れて、ひそかに逃れて山に隠れた。ゴータバヤは戦はずして位を得たのである。

ゴータバヤは王位に即いたものゝ、サムガボーデに對する人民の信頼が恐ろしく、莫大の賞を掛けてその首を求めた。いくつもいくつも贖頭が持ち運ばれた。それは皆、サムガボーデの身代りに立つたものである。山に隠れたサムガボーデはかういふことは少しも知らず、黄ろい衣に代へて、靜寂の生活を樂しみ、菩薩の行を修めてゐた。或る山の地の木樵が妻にそゝのかされて、その賞金をめめてに、サムガボーデの在家を探さうと企てた。或る日圖らず、二人は山に遇うた。尋ねる王とは知らずに、木樵は自分のめあてを話し、辨當を出して半分を王にすすめた。王はこれを取つて地に蒔き、「私が若し正覺を開くべきならば、米よ直に實れ」と曰うた。見る／＼内に煮られた米から芽が出て穂が顯はれ、實を結んだ。王は自分がその尋ねられる人であると教へて、自分の頸を與へて、その木樵の貧

乏を救はうとした。「木樵よ、この頸を都に持つて御出で。然し先方に疑も起るであらうから、頸を白布に包ませて椅子に置く様にするが宜しい。すると證明はその時この頸がするから」と教へた。木樵は泣く／＼教の通りに、ゴータバヤ王の前にその頸を出し、白布に包んで椅子に置かせた。頸は口を開いて、「私がサムガボーデだ」と證明したと曰はれて居る。

噫、誰か何處に、シユリーサムガボーデを非難しうるものがあらうか。彼は宗教に淫した。餘りに清かつた。人民を却つて不幸にした。王者としての幅がない爲め、却つて國を亂に導いた。かういふ非難が果してこの聖王に報いらるべきものであらうか。よしんばこの非難は正當なものであつても、王位を捨て、正覺を得んと進んだ求道者に何の關りもない。王は猶今日も錫蘭に生きて、國民教化の中心となつてゐる。聖なる死は常住の生に入る門だからだ。

四、支那の法難

一、兩種の文明の邂逅

新しい文明が輸入せられる時には、必ず其處に古い文明と衝突して渦を生ずる。この渦を乗り切つて、新しい文明を汲ひ取る國民は生命ある國民である。この渦は幾多の悲劇を生む。新古の文化を代表する戰士、攻守其の位置を異にするけれども、其の人達の血や肉やに依つて、その渦を乗り切つて、新文化を創造することが出来たとすれば、我等は暫し、敵と味方とに分れて、創造の苦しみをした先人に滿腔の感謝を拂はないでは居られない。

佛教は後漢の明帝、永平十年（西紀六十七年）、初めて迦攝摩騰、竺法蘭二師に依つて、支那に傳へられた。神農氏以來、漢民族の實際的、主意的、功利的、現

實主義の文化は、この日、葱嶺そうれいの彼方、インダス河の河岸に生れた冥想的、主智的、超脱的、非現實的の文化の兄と相見えたのであつた。この兄弟は顔も心も餘りに多くの點で違つてゐた。インドの兄は瘦身長軀、顔の輪廓は美しいが、何となく悲しみの色を湛え、眼の光は空想的に輝いて、現實性の乏しさを物語つてゐる。黄河の流域に育つた弟は丈は少しく短かく、その代りにでつぶり太つて、顔の色艶も美しく、常に微笑を湛えて、現實界の雄者であることが、その眼の色に讀まれる。この二人の兄弟はこの日相見えて、握手をするには餘りに性格の相違が甚しく、と曰つて直にいがみ合ふには、今まで餘りにお互、路傍の人であつたので、暫らくは、睨み合せて、對者を研究し、その隙を看破せんとしたのであつた。不老長生ふろうちやうせいを理想として、治國平天下を實際原理とする弟は、動もすれば、現實を迷妄界と一蹴しよくし逃避たうひして、彼岸の世界にあこがるゝ空想的な高遠な理想追及者の兄を迎へて驚いた。人に依つては全く別の世界に住むものであることを、こ

の日初めて知つたのである。爾來、兄は追々にこの違つた土地にその地歩を占めんとした。弟は時々反噬はんせいの牙を磨いて兄を苦しめた。

二、「法の興廢在此一舉」

迦葉摩騰カセウマトウ、竺法蘭チクホフランの二師が、白馬に佛像經論を乗せて洛陽ラクヤウに來たのが永平十年いろ／＼生きた宗教の生きた効驗が知られて、明帝メイダイ始め人民の歸崇ききゆうを得、白馬寺の門前が賑しさを加へて行つた。『四十二章經』、『十地斷結經』等の經典が追々に翻譯せられた。永平十五年、新しい教が漸次に地歩を占めて行くのを見て、嫉妬に堪へない道教の徒は上奏して、各々その所持の經卷を火中して火に焼けないのを勝として、佛教と道教との優劣を見たいと請願した。そこで、白馬寺の前に壇を築き、火を焚き、愈々大切にする經卷を火中せしめた。南嶽ナンガクの道士褚善信チヨセンシン、北嶽の道士桓文度クワンブンド、諸山の道士費叔才ヒシクサイ、祈文信等キブンシン、幾百人の道教の徒が集まり、先

づその數百卷の書を壇上に飾り、香を焼いて呪文を唱へ、壇に火を放つと、思つた様に行かずに皆焼けて仕舞つた。褚善信チヨゼンシンと費叔才ヒシクザイの二人は且つ愧ぢ且つ慨りて自殺をした。佛教の側に於ては、迦葉摩騰カセウマトウは高らかに次の偈ゲを唱へた、

狐は獅子の仲間にあらず

ともしびは日のひかりにおよばず、

池にわだつみのひろさなく、

丘に峯の高さなし。

法の雲、この世に垂れて、

善き種は芽生え、

ひかり十方にあまねくして

人の子の眠をひらく。

壇に火を放てば、火は炎々と燃え盛つて經卷を包んだが、梵本の經卷は少しも

焼けない。眼のあたりこの不思議に打たれて、簪を投じて出家をするものが多かつた。この第一回の衝突に於ては佛教側は苦もなく勝利を占むることとなつたと傳へてゐる。

年を送る事百八十年、西紀二百四十七年、康居カウコの人、康僧會カウソウエに依つて、初めて吳ゴの都建業ケンゴウに佛種が植ゑられた。これより先、既に佛教渡來して二世紀の歳月を送るに垂んとしてゐるので、江南の地一帯には佛の光が普ねく行き渡つたけれども、江左の地には吳の支謙シケンが來つて、孫權ソンケンの長子の師補となり、經典翻譯に従事したことはあるけれども、猶佛教を信するものを生じた譯ではなかつた。康僧會カウソウエはこれを慨いて、身を以て吳の地に傳道し、寺塔を起さうと覺悟し、先づ建業に來つて、茅屋を作り、佛像を安置して禮拜讚嘆した。吳の支謙は優婆塞であつて出家ではないので、江左の人が出家のすがたを見たのは康僧會が初めてであつた。その常と違ふすがたは人々の注意を引き、官吏は直に之を孫權に告げた。孫權の

云ふやう、「漢の明帝が神人を夢みて佛教を知つたといふが、謂ふにその流れを汲むものであらう」と。召していかなる靈驗を有するものなるかを尋ねた。康僧會これに答へて、「我が大師世尊入滅し給うて、既に千年を過ぎてゐるが、佛舍利は今に靈驗を示して勸請する所に顯はれ給ふのである。古、阿育王が八萬四千の塔を建立せられたのも、この靈驗に依るものである」と。孫權は之を信じない。云ふには、「若し佛舍利を得ることが出来たら、その爲めに塔を建てよう。口先許りで實際に得られないやうなら、民をまどはすものを刑する常例に従はう」と。康僧會は茲に七日の期日を貰うて、「法の興廢此の一舉に在り」と、至誠を盡し、潔齋して、佛舍利を勸請し奉つたが驗がない。更に七日の延期を請うて焼香禮請したが又驗がない。孫權は怒つて、民を欺くものとして斬らうとしたが、更に七日の猶豫を乞ひ、死を決して懇請した。「大法は必ず靈驗あるべきに拘らず、我等に感應のないのは如來の冥罰を受けて居るのかも知れない。さらば王者の刑を待つ

要が何であらう。自ら死にさへすれば宜いのである」。三七日も既に暮れたが一向に驗がない。今や事終る、曉にも至らば死を決行しようと思つて居ると、夜のしら／＼明け初めた頃、鏗然として、銅瓶の中に響があつた。見れば五色の光眩ゆき佛舍利であつた。一同大に歡び直に朝廷に持參した。孫權は朝臣と共に驚いて之を驗べて見ると、佛舍利の落ちた瓶の底がこはれてゐたので、益々感動して約束の如く塔寺を建立し、地を佛陀里と呼び、寺を建初寺と名けて、康僧會をして其處に居らしめた。これより江左の佛教が大に盛んになつたのである。

孫皓が位に即くに及んで大に政を改め、法令を嚴にし、淫祠の對治を初め、その手が佛教にも及ばうとしたが、建初寺は佛陀の靈驗もあり、先皇の建立せられた所であると知つて、康僧會を迎へ、因果應報の道理を聞いて、後には厚く佛教に歸するに至つた。

三、種々の法論

法論と曰つても大して高遠な理論が戦はされた譯ではない。元來、道教は老子の教が下層社會の迷信と纏ひ付いて出來たもので、長生不死を理想とし、病氣平癒などの爲に符水祝法をやると云ふ卑俗な宗教であり、その強味はたゞ、佛教が外來の教であるに對して道教は中國古來のものであるといふ丈けであるから、その議論が幼稚で、外的で内容的でない爲めに、法論に於ては、佛教側はいつも易と勝利を得てゐる。道教はかういふ法論の間に漸次に佛教を取り入れ、一方その教理を理論化すると共に、中には全く虚妄な説を唱へて勝利を得んとした。それで法論は常に存外易々と佛教の勝利になつてゐるが、王者の親臨する晴の舞臺に、論議を闘はし、その結果に依つては、いかなる法難を引き起すかも知れないのであるから、法論者は非常に緊張した殉教者の意氣を以てその闘の舞臺に上つ

たことは云ふ迄もない。

佛教道教優劣如何の問題がその戰場に顯はれたことがある。佛教側は直にこれに答へた。「老子は天を以て師とし天に事へて居るが、諸天は佛陀を師とし佛陀を禮して居る。以てその優劣を知るべきである」と。天とは神である。天の道をこの世になさんとした老子は、印度の諸神を悉くその脚下に蹂躪した佛陀に論理上……甚だ外型的な論理であるが……契ふ筈がない。道教側は見事この立場に於て破れたのであつた。かういふ論理で破れる様は道教の人達であつた。お互に思想の了解がなくなつて交される議論であり、殊に道教の方では人民の迷信に基を置いてゐる丈けの宗教であるから、論議に高遠な議論を聞き得る筈はなかつたのである。

梁の武帝の普通元年(西紀五百二十年)は北魏の光明帝正光元年に當つて居る。この年光明帝は元服して、沙門と道士を宮中に集めて對論せしめた。道教の方で

は姜斌キヤウシヨク、佛教側では曇謨最トシムサイが鬪士であつた。帝は「佛と老子と同時か否か」と問うた。姜斌曰く、「開天經に依れば、老子は定王の三年に生れて、八十五の年天竺に入り、佛陀を濟度して侍者としたのであるから、同時代の人である」と。曇謨最これを反駁して云ふやう、「佛陀は昭王の二十四年に誕生してゐられるから、時代が三百五十年から違つてゐる。どうして天竺に入つて佛陀を侍者とすることが出来よう」と。帝は臣をして開天經の眞僞を判せしめ、僞經と定つて姜斌は馬邑に流されてこの事件は終つた。

北齊の文宣帝の時、嘗て梁の武帝に放逐せられた道士、陸修靜リクシュセイは齊に來り、黃金を要路に蒔いて、漸次に帝に取り入り、道教を興さんとした。文宣帝、心惑ひ、天保六年(西紀五五五年)勅して、沙門と道士と方術を戦はし、對決せしめ、自ら之を親裁した。當時、法上ホウジョウが僧統そうどうしてゐたが、「方術の如きは小技であつて、沙門のなすべきことではない。然し勅命なれば拒むことも出来ないから、最下座の僧

になさしめませう」と、酒呑みの曇顯をして其の任に當らしめた。そのとき泥醉してゐた曇顯は、人々に扶けられて高座に上り、道士に向ひ、「私は酔うて確かではないが、卿等が、沙門一を顯はせば道士は二を顯はすと曰つたのは事實か」と問ひ、然りと答へられ、片足舉げて立ち上り、道士に向つて、「私は既に一を顯はしたから、卿等二を顯はされよ」と曰ひ、この奇抜な方術に、陸修靜も策の施すところがなかつた。道士の側では改めて辯論にて勝たんと思ひ、「佛徒は自らを内と云ひ、道家を外と云ふが、内は小にして外は大である」と云ふや、曇顯すかさず「天子は常に内に居給ふが故に小人か」と難じて道士の口を閉ざしめた。この對決は非常に佛教に有利であつて、帝は勅して道教を排し、北齊の地に道士を絶つに到つた。

唐の高祖の武德八年二月(西紀六二五年)、國學に幸して、釋奠し、儒教と道教と佛教の名士を集め、道士を第一、儒者を第二、沙門を第三の位置に即かしめた。

唐の高祖は隋に代つて天下を取り、その宗教政策を改めて、益々勢を増さんとする佛教に一撃を加へ、僧侶の數を減せんとし、法琳が破邪論を顯はし、廢佛の議を抗辯してゐる時なので、この席次は、頗る意味深く、佛教側に取つては重大な事件であつた。この時勝光寺の僧慧乘これに對して論抗した。道士の劉進喜なるもの、奏して云ふやう、「悉達太子は佛となることが出來ないで、六年間道^①を求めて初めて佛となることが出來た。されば道は佛を生じ、佛は道に依つて生じたものである。道は佛の師父であり佛は道の子弟と曰はねばならぬ」と。道士は佛經に無上正眞之道^②とか體解大道の道を道教の道ともちつて道先佛後を主張したのである。慧乘答へて云ふやう、「佛陀は周初の出世、老聃は周末の出世である。末なるものがどうして初のもの師となることが出來ようか。」道士曰く、「茲に道と云ふは天地に先つて存する道を云ふので周の時に出世した老子を云ふのではない。」慧乘とゞめをさして云ふ。「既に道といふ。己れに在るを徳と云ひ、物に及ぼすを

道と爲す。されば道は金冠を頂き、黃褐を被てゐる人ではない。道佛の先後を云ふ汝の立論は誤つてゐる」と。劉進喜對ふる所を知らず沈黙に終つた。

唐朝は李を姓とするものであるから、老子の裔なりとなし、道士のこれに諂ひてこれを利用して勢を張らんとするものが多かつた。大史令傅奕^{フエキ}は武德四年、廢佛十一箇條を上表して、佛教經典が妄誕信するに足らず、民を惑はし、國を亂し家を破るものであるから、中國に之を禁じてその本國に歸らしめよと勸めたので高祖は之を容れ、廢佛の舉に出でんとした。傅奕は七度までも上疏して廢佛を迫つた。其の謂ふ所は、「親に事へ君に事へるは忠孝の徳である。臣子の分である。然るに佛教の祖、釋迦は城を逾へて出家し、父に背き君に背いてゐる。これ實に不忠不孝の教ではないか。」といふ様なことであつた。總持寺の普應は太史局に押し掛け傅奕に迫つて對論したが傅奕は答ふる所を知らずして、只徒らに漫罵するのみであつた。幼稚な傅奕の議論を破ることは、何でもないが、どうすることも

出来なかつたのは、高祖の心である。高祖は一面甘言に乗つて佛教を苦しめんとした點もあるが、又他面にはその經世上の宗教政策から、盛んな佛教を抑へようとした處もあつた。法琳は書溪山等に隠れて木食して、晝は佛經を學び夜は佐典に親しみて形を潛め、徳を韜かくしてゐた人であるが、時世を慨して『破邪論』を著し、之を獻じて、破佛の議に抗辨した。後爲めに筆禍を買うて、投獄せられたが、意氣益々盛んに正を述べて屈せず、遂に益州に流されて、蜀の百牢關に客死した。斯くの如く大勢は動ともすれば佛教に非利を來さんとしたが、然し大體に於て、その殉道者的氣魄に依つて廢佛を食ひ止めたのであつた。

顯慶四年(西紀六五九年)、高宗、合璧宮にあつて、更に佛教と道教との法論を戦はしめた。佛教側の會隱、神泰が初め立論したが、道教側に佛教の智識がないため、破斥が的を外れて、さつぱり要領を得ない。其處で、道教側に移ると、道士の李榮リエイが道、萬物を生ずるの義を立てた。惠立エリウが問うやう、「その道は知ありと

せんか、知なしとするか」。李榮答へて曰く、「人は地に法のりとり、地は天に法とり、天は道に法とするものである。既に天地の法とするものであるから、知なしとすることは出来ない。」惠立進んで曰ふ、「若し知あらばたゞ善だけを生ずる筈である。然るにこの世上に惡の滿ち／＼て居るはいかなる理由に依るのであるか。かういふ現實に見る醜惡を生ずる道をどうして有知とすることが出来よう。この無知にして善惡を分別することの出来ない道を天地が法とする筈がないではないか」。道教側は茲に天地創成説のいつも受ける難詰を解くことが出来ないで、默然として座を下つた。次に揖シユウカウシユ黃壽進んで老子の名義を立てたが、會隱思ふやう、「今この立義を難すれば、老子を祖とする天子の怒を招くであらう」と。依つて曰ふには、「黃壽は身道士であり乍ら、諱忌を知らないで、子孫の陛下に對して先祖の諱を論じてゐるのはいかゞかと思はれます。」高宗うなづいて別に義を立てしめようとしたが黃壽はどきまきしてどうすることも出来ない。高宗これを救うて云ふやう、「二家

の論を聞いて見るに、まだ其の宗旨を明かにすることが出来ない。惠立俄に對へて曰ふやう、「二家の論の宗旨が明でないことは誠に救命の通りであります。然し佛教側で云ふ義を道教の士が知らないで、論議をかけて來ないため、宗旨を明かにすることが出来ないで、これは道教側の罪であります。今佛教の肝要を顯はせば、因縁の二字に盡きます。いかなるものでも因縁に依つて生じないものはない。この宮殿の柱を例に取つて見ても、茲に直に五縁を數ふことが出来ます。一に、こゝろ亂れないこと。二に、眼の官能が破れて居らないこと。三に、光があること。四に、現に眼の前に境として存在すること。五に、柱と眼との間に障りのないこと。この五つの縁が具つて柱が存在するのであります。太陽の光が沒れて、紙燭未だ照し出さない時には、朱の高欄はこの世に存在しないのであります。米を蒔いた場合、雨露水土と太陽の光と農夫の勞苦が加はつて、充分なみもりを得るので、その中の一つを缺けば、縁のないため生じないことになります。

人そのものについて曰つて見ても、内には業があつて因となり、外には父母の縁ありて茲に人があるので、一を缺けば人はない。いかなるものを擧げて來ても、それは皆、因縁和合に依つて生じ、すべてのものと關係の上に成立つものであります。眞偽善惡美醜いかなるものも、みな萬物相關相資、互に因となり縁となり相資け相關係してお互の成立を見てゐるのであります。それであるから、經には、深く縁起に入つて諸の邪見を斷つとあります。これが法の實相であります。然るに老莊は或は無因と云ひ、或は宿命を語つて居りますが、これは邪宗で、法の本を明かにしてゐないのであります。」

宮殿を辭し去らうとする時、「師等の説いた因縁の義は誠に理に契うてゐる。何故早く曰はなかつたのか」といふ救命が傳へられた。道士の方には、何故佛教を學ばないのかといふ御叱りがあつて、この法論は見事佛教側の勝利となつて終つた。

四、魏の武帝の廢佛

北京を發して西北へ、萬里の長城に併行して汽車が走る。張家口から、少しく南に折れ更に西へ走ると大同府に着する。茲で馬を賃して道を西に取ると雲崗に出る。雲崗には有名な石佛寺があつて、その十八個の石龕は、構想の豊富な壯美雄大な佛教美術を以て満たされ、龍門の石龕と相並んで、世界の珍と稱せられ、近時の佛教の研究者、美術の憧憬者を數多引き寄せて居る。

大同府雲崗石佛寺とは抑も何であらうか。いかなる理由に依つて、かゝる壯大なすばらしい佛教の彫刻像が作られたのであらうか。この疑問は我々に、悲しい幾多の出來事と、それにかゝる偉大な壯美な精神のはたらきとを教へて呉れる。

北魏が大同府に都を築いて、五代を経た武帝の世であつた。それ迄、インダス河の流域の沃野で育つた文化と、黄河の河畔で生長した文化とは顔を見合せてか

ら約四百年を経過して、時々小せり合を演じて來たのであつたが、この時遂に一大衝突して恐しい悲劇を演じ出したのであつた。武帝、崔皓、寇謙之、玄高、曇始など云ふ人々が、この悲劇の舞臺に上つた花形役者であつた。

寇謙之は道教側の大立物であり、又、支那文化の改轉期に於ける一方の旗頭であつた。彼は山に入り石室に隠れて仙人より術を授かり、嵩山スウサンに於て、太上老君の告敕を受け、天師の位に上り、道教を整理し宣揚する様神託を受けた。彼は魏の都に出で、司徒崔皓に依つて、武帝に、老君より授かつたと稱する書を献上し、そろ／＼己が志を成さんとした。武帝始め朝臣は容易に彼を信用することが出来なかつたが、司徒崔皓は以前から道教の信者であつた爲めに、熱心に寇謙之を勸稱し、遂に武帝の心を動かして、寇謙之とその門人を宮中に引き、數多の名門の人々を道士たらしめ、魏朝をして非常に道教の色彩を色濃くなさしめた。寇謙之は再び嵩山に入りて壇を築き、帝の冥福を祈り、老君再び下降して敕を垂れ、

帝に太平眞君の號を授け、謙之をして帝の治を助けしむると言ひ濁した。この爲め年號も太平眞君と改められ、武帝は崔皓と寇謙之の自由に動かすところとなり、早晚佛教の上に一大迫害が加はり來る模様となつた。

これより先延和元年、武帝は涼の沙門玄高を招いて、太子晃の師たらしめた。玄高は實に菩薩精神の體驗者であり、勇敢な大乘道の行者であつた。初め河南の地にあつて山居し、衆を教へてゐたが、河南王世子曼に、玄高は徒衆を集めて、國の災を起すものと讒言するものがあつたので、害せられんとしたが、免がれて、河北の山林に隱遁することゝなつた。山中の猛獸も玄高の徳になづいて平和な學場に、百餘の徒衆が行を修めてゐた。後、河南王及び太子共に、徒らに讒言を信じて、高僧を苦しめた愚を耻ぢて、禮を厚うして迎へたが、弟子達はそれこそは自ら死地に飛び込むもの、師の命を絶つともとなりはせまいかと案じていろいろにとゞめた。山の中の草木までが枝を折り道に横はつて、その行を阻み、岩

が崩れて道を塞ぐといふ程であつた。然し玄高の意志は堅い。「私はたゞ道を弘めたいのだ。自分の身を顧みて居るものではない。」かういふ大志願の前には何物の邪魔もない。「風も息み、道も開いて」玄高を山の中から送り出した。かくして玄高は厚く河南の王に迎へられて其の地に化を垂れ、續いて涼に入り、其の地に大乘佛教を弘めてゐたが、偶々北魏の武帝が涼を亡ぼしたので、玄高は武帝の招きに依つて魏の都に行き、太子晃の師となつたのである。

崔皓は太子晃が邪魔であつた。若し武帝の身に萬一の事があつて、玄高の教養を受けた晃が位に即いたら、自分の目的が達せられない許りでなく、自分の命が危ないことになる。何よりも先きに晃を廢せねばならない。崔皓は屢々晃を武帝に讒したので、遂に武帝も晃を疑ひ出して牢に幽死せしめ様とした。晃は自分の無實の罪を歎き、牢屋の苦を玄高に訴へた。玄高は之を慰み、金光明齋をなし、七日の間識法を修すると、武帝の夢に父祖劔を取つて顯はれ、何故に讒を信じて

太子を疑ふかと詰つた。武帝は恐れて太子をゆるしたが、崔皓と寇謙之とは更に讒を構へて、今度は玄高を強いた。「太子には確に異圖があつたのであるが、顯はれて獄に投せらるゝや、玄高の妖術を用ひて、天子の夢を驚かし、有耶無耶に葬らうとしてゐるのである。若し未前に之を防ぎ、玄高を誅戮しなければ、どんな大事が起るかもしれない。」武帝は又も惑はされて大に怒り、玄高を捕へて獄に下した。

玄高は既に大勢を見てゐた。大法の興隆、文化の躍進のためには、犠牲の血祭の止むを得ないことを知つてゐた。弟子に語つて云ふやう、「佛法が衰へようとしてゐる。私は崇公と共に先づ其の禍に當らう」と。崇公とは涼州の沙門慧崇のことで、當時、尙書の韓萬徳の師であり魏朝に於ける高僧であつた。遂に玄高と慧崇とは太平眞君五年捕はれて幽閉せられた。玄高は弟子等に告別して曰つた。

大法の化益も、縁に依つて盛衰は免がれない。よしや盛衰はあつても、大道

は恆に湛然として常住である。汝等も、私の後に、私と等しい運命を負うて行かすばなるまい。我が弟子の内、玄暢だけは、南に下つて難を免がれ、時の至るを待つが宜しい。私の後を逐うた汝等の血の滴たりの中から、大法が必ず興つて来るに相違ない。どうぞみなが心を修めて、中心に後悔のおもひのない様にして貰ひたい。

かくして玄高は四十三歳にして道に殉じた。満都の道俗みなその死を傷んだ。弟子達は悲しみに堪へないで、屍を抱いて慟哭し、師匠の死後の生所を知りたいと思つた。傳に依れば、其の時一つの奇蹟が顯はれ、屍の玄高は立ち上つて、弟子に告げた。「崇公は常に極樂世界へ生れたいと願うて居られたが、望みの如く安養に生れられた。私は惡處に生じ、再び、この世界に生れて、我が本願の如く、衆生の救ひに従ひたい」と。これ實に菩薩の大悲である。慈悲あるが故に涅槃に入らず、智慧あるが故に生死に住しない。不住處涅槃は大乘教の理想の世界であつ

て、玄高は實にその體驗者であつた。

玄高の死後二年、武帝は遂に廢佛の詔を下した。この廢佛に就いては、勿論佛教側にも弱點はあつた。大平眞君七年、蓋吳の亂があつて、武帝は親しく、長安に兵を進めたが、この時、精舎に入つて亂脈な僧侶の生活を見た。座を圍んで酒を飲む僧侶、高歌放談して快を取る僧侶、密室には女が藏うてあり、藏には兵器が貯へてあつた。之を見た武帝は大に怒り、佛法は眞に妄誤である。言と行と天地の相違がある。兵器を貯ふるは賊徒に組するものであらうと。茲に長い間、崔皓、寇謙之の上申し來つた處を用ひて、廢佛の命を下し、寺を焼き僧徒を殺さしめた。たゞ太子が佛法の信奉者であつた爲めに、帝を諫め、密に詔書を改め、先づ遠近に其の意を知らしめ、佛像經卷は土中に隠したり持つて逃げしめたり、僧侶をして自ら處置する餘裕を與へたので、幾らか助かつたが、それでも、「あらゆる浮圓形像、及び一切經、皆擊破して、焚燒し、沙門は小長となく之を坑にす」

とあるが如く、多くの僧侶は殉教者として倒れ、數多の塔寺も一つの形さへ殘さぬ様になつたのであつた。この殉教者達の中には勿論、玄高の弟子達はみなその名を列ねてゐた。

この廢佛の慘事は長くは續かなかつた。二年目には寇謙之の死し、四年目には崔皓勅勸に觸れて腰斬せられ、その五族悉く誅を受けて、帝もその所爲の非を知る様になつた。これには曇始の力が與つて効があつた。崔皓が殺される年の元日に宮城の門に一人の沙門が立つてゐた。この頃は既に魏の國內には僧侶の姿を見ない様になつてゐたので、門番は、珍しい一人の沙門が錫杖を携へて、門の中へ入つて來るのを見咎めた。見れば足は顔よりも白い異僧である。之を帝に奏上すると、直に軍法に依つて斬れよといふ命令、幾度、刀を下しても斬ることが出來ない。驚いて奏上すると、武帝は怒つて、自ら佩刀を取つて斬り付けたが、更に斬れない。只劍を下した跡に少しの痕を殘す許りである。丁度その時、宮廷の北園

に虎を養うてあつたが、その沙門を檻に入れても、虎の方から恐れて近づかない。武帝は驚いて、沙門を堂上に招して、法を聞き、その時以來、自分の過失を知り、後悔し初めたのであつた。その沙門は即ち曇始であつて、白足和尚と呼ばれ、長く山林に隠れて頭陀の行をしてゐたが、最後に出でて、身を投げ出して、佛教の破滅を防いだのであつた。

既に寇謙之は死し、崔皓一族は悉く誅に伏し、武帝も夢が覺めた様に、廢佛の暴舉を悔み初め、佛法復興の詔書を出したが、愧懼の餘り、熱病にとりつかるゝ程であつたので、事實上、廢佛は終つて、正法の興立に向つたのであつたが、積惡の武帝は正平二年に常侍の宗愛なるものゝ爲めに弑せられて、孫の潛が立つて文成帝と呼ばれた。

文成帝は位に即いて直ぐ様、佛教再興の勅令を出した。

世祖太武、德澤遐かに被むり、沙門道士往々林を成す、而して寺舎の内に凶

黨あるを致す。先朝治を按じて、其の有罪を録せしむ、所司旨を失うて一切禁斷す。朕、鴻緒を承けて聖道を隆ならしめんと志す。其れ天下に令して郡縣各々浮圖一區を建てしめ、沙門たらんと欲する者を聽さしむ。

思想は水の如く地をくゞつて来る。官權の力を以て壓し止めることの出来るものではない。信念の火は草を焼くやうに人から人へ燃えひろがる。有司の手で消すことの出来るものではない。武帝は王者の威を以て佛教に當つた。或るものは玉碎して殉教の華を開いた。或る者は暫らく屈して山林に隠れて、道を修め書を著はし、時の至るを待つた。一人として王者の威に打たれて信を捨て節を屈するものはない。皆信火を胸に藏して大法の光を高く掲げん日を待つた。果してその殉教の血に塗れた大地からは、愈々堅く強い信が芽生え、山林に隠れた人達の中から、不借身命の教法宣傳者が顯はれた。玄高の豫言通りに佛教は非常な力を以て復興したのであつた。文成帝はこの法難中、醫者に化けて僅かに難を免がれた。

罽賓の沙門師賢を沙門統となし、師賢の死後は、石峯にかくれて『付法藏因緣傳』を翻譯してゐた曇曜を迎へて、沙門統となし、其の勸めに依つて、今の大同雲崗の石佛寺を建設し、山を鑿ちて五所の大窟を開き、佛像を刻み、以て先考の滅罪の祈願、五祖の追善供養をしたのであつた。されば壯美を極むる石佛寺の藝術は我等佛教徒に取つては悲しい又勇ましい思出でならざるを得ない。

時代は少しく進むが、我等は帛法祖兄弟を忘るゝことが出来ない。茲に追記してその徳を偲びたいと思ふ。兄は帛遠、字は法祖、弟は帛法祚と呼ばれてゐる。龜茲國の生れで、兄弟共に勝れた秀才であり、兄の法祖は早くから出家し、弟の法祚は二十五歳の時に出家してゐる。兄は王者の間にも敬はれ、その感化も深く民衆の底をくぐつてゐたが、道士の王浮と屢々論議し、王浮は常に屈して、辭を出すことの出来ないのを耻ぢ怒つて、化胡經を偽作して、老子が遠く西域に化を

垂れて、佛陀を弟子としたといふ論議の證權となさうとした様なこともあつた。かういふ名智の法祖であるから、王者が引いて師となしたといふことは屢々あつたが、法祖は國が亂れて群雄干戈を争はんとする世相を厭うて、世を隠れて道を修めようとしてゐた。秦州の刺史となつた張輔は、祖の名聲高く、徳が廣く世上に傳へられて居る有様を見て、還俗して、自分に事へしめようとしたが、法祖が飽く迄これを肯んじないので、これから怨を結ぶこととなつた。それに論議に於て法祖に常に敗れて怨を抱いてゐた者が讒を構へたので、帛法祖は張輔のために殺された。この殺される時、法祖は少しも怨みるところなく、これ皆宿業のなすところであつて、今の偶然ではない。決して殺す者の所爲ではないと佛陀を拜して、前身の罪を懺悔し、張輔の爲めに善き友となつて、罪業を作らず報を受けたい様にしようと誓うて殺された。民衆はその心の嚮導者を失うて非常に悲しみ、羗人は兵を率ゐてその怨を報せんとしたが、張輔は遂にその徒の爲に殺された。

弟の帛法祚も、兄と同じい様に、その明智が仇となつて、梁州の刺史、張光の爲めに還俗を強いられ、承知しないために張光の爲めに殺された。兄弟共に殆んど同じい死を遂げてゐるが、官権の威壓を押し退けて死を以て沙門としての節操を持した點は、實に尊い殉教者として仰がねばならない。

五、北周の法難

北魏の武帝の法難があつてから、百二十年後、北周の武帝に到つて再び、大法難が起つた。北周の武帝は支那の王者中にあつても、屈指の英傑であつて、辯もあり學もあり勇斷もあり、王家の統一、思想の歸一を目的として斷行した廢佛であつたから、この法難は頗る手痛いものであつた。然しかういふ王家の統一、思想の歸一といふ様な高尚な目的も勿論その根ざしてゐる處は至極卑近なところにあつた。當時、黒衣のものが王者になるといふ噂さが傳へられてゐたので、これを

氣にした武帝は黒衣を着た佛教の沙門を嫌ひ出したのである。そこへ、道士の張賓が巧みに王の心に取り入つたので、この個人的愛憎の感情がだんだん擴大されて武帝の國家主義の理想ともつれて、遂に未曾有の大法難となつたのである。張賓の説く所は、佛寺なき上古は世平かに民安堵するを得たが、邪教國に入つて國家亂れ安く、佛教を信奉した國は皆短命にして終つてゐる。佛の心が若し大慈悲ならば、民を利し國を益することが佛心に契ふ所以で、民の財を盡して莊麗な佛寺を建立するはその教旨に乖く譯である。城は寺であり皇帝は如來であり、町は僧伽で、夫婦唱和するはその聖衆である。茲に佛を廢して佛旨を成就することが出来るといふにあつた。

天和四年(西紀五六九)、武帝は佛教儒教道教の名士に命じてその優劣を論せしめた。道安は二道論を作つて献上し、武帝の道教主義を碎破したが、何とも返答なしに濟んだ。更に三教の有力者及び文武官を集め、道教を第一に儒教を第二に

佛教を第三に置かんとしたが議論紛々として定まらない。武帝曰く、儒道の二教は中國に起つたものであり、佛教は後から來たものであるから、僉議を待たずに道教を先とするものであると。天和五年司隸大夫甄鸞、笑道論三卷を作つて上つた。道教をあざけり傷け、本意に契はざるものとして庭前に之を焼いた。

かくして追々に武帝は道教にかぶれ出して、建德三年愈々廢佛の意志を固め、再び沙門と道士にその優劣を論せしめた。もとより之に依つて佛教側を叩きつけるつもりであつた。初め張賓、高座に昇り、揚言していふ。「夫れ大道は清虛にして淳一無雜、壽、天地と畢りを同じうし、風教先づ中憂に被むり、初めもなく終りもない。人民が之に頼つて長生を得るのである。佛法は虛妄にしてその言のみ大に過ぎ、本土に容れられずして、中國に流れ込んだものである。人民はその事を知らずして詭説を信するものである。」

智炫出でて曰く、「大道は清虛にして淳一無雜と云ひ、風教先づ中憂に被むると

曰ふ。然らば風教は何の時に起り、何の處に説かれたのであるか」。

張賓答へて曰ふ。「聖人が世に出づるには定まれる時がない。大道の説かれるにも定まつた處はない。道教は本來本有である」。

智炫更に迫つて云ふ。「既に時なければ出世を云ふ譯には行かない。定まつた處がなければ大道の説かれたといふことは有り得ない。本來本有のものを清虛と形容することは出来ない。汝の云ふ壽は天地と終りを同じうすることなれば、それは無始無終ではない。」

張賓、論議に破れて徒らに惡口するを見て、武帝自らこれに代つた。

● 佛法に三種の不淨がある。教祖に妃と子とあるは佛の一不淨である。經律に三種の肉を許すは法の二不淨である。僧が互に争うた事蹟あるは僧の三不淨である。道教にはこの不淨がないから、朕は不淨あるものを禁じて、不淨なきものを以て國を治めたいと思ふのである」。

智炫答へて云ふやう、「陛下は經論を引て宣べられるのであるから、強ち謬りではない。然し道教の中にはこれよりも甚しい不淨があります。天尊が紫微宮に五百童女を侍づかせてゐるのは主不淨、請福の時、鹿の脯百梓、清酒十斛を用ゆるは教不淨、道士代々罪過を犯し來つた事は史に明かなことでこれは衆不淨であります。陛下が若し、佛法の中に不淨がある故佛法を退けよと曰はれるならば、陛下の下に亂臣賊子の出づる場合、位を離れると曰はれますか。陛下は佛法を廢して、道教を立てようとせられるが、これは丁度庶子を嫡子にする様なものであります。」

この語が非常に武帝の胸に應へて、武帝は色を變へて奥へ入つた。武帝は庶子であつたからである。人々は皆色を失うて心配した。智炫が曰ふには、主辱めらるれば臣死するものである。死は淨土に歸ることである。何でこれを懼れよう。無道の君と生を共にすることを耻づるものであると。

翌日遂に廢佛の勅令が出た。道場も傍杖を喰つて難を受けた。智炫等は齊に走つて難を免れた。寺塔を壞し、經像を破り、沙門道士二百餘萬を還俗せしめた。武帝は佛道二教を廢してこれに代ふるに通道觀といふものを立て、學士百二十名を置き、この名は道教に非ずして實は道教に違はないものを以て、國家の思想統一をなさんとした。先きに二道論を作つて愕々がくがくの論議を上つた道安はこの時、山林に隠れてゐたが、武帝は探らさせて捕へ來らしめ、親しく象牙の笏を賜ひ通道館の學士に任命せんとしたが死を以て拒み、大法の衰滅を慟哭して餓死したのであつた。

建德六年、周は齊を滅ぼして、鄴都を占領した。佛教を奉ずる齊に道教主義の周が勝つたといふので得意になつた。武帝は更にその廢佛の場所を擴大して齊の佛寺經藏を毀ち、僧尼三百萬人を還俗せしめた。この時、武帝は先づ臣下百僚を集め、五百餘の僧侶を召して親しく、廢立の義を述べた。「儒道二教は禮儀忠孝を説

き世に益あるもの故に之を存し、佛は無相を佛とし乍ら、徒に塔廟を立て、民の財を盡し、世に益なきものなれば寺塔經僧を破壊し、僧尼は總て還俗せしむるものである」と。王者の後ろに劔がある。暫らくは五百の僧侶も首を俛だれて語がなかつた。只悲痛の涙が銘々の頬を流れた。武帝は卿等の意見はいかにと催促した。すると末席に控へた慧遠は茲に舌戰の火蓋を切つた。「陛下の仰せられる真佛無相といふは其の通りであります。然し乍ら無相の佛は茲に表顯されて、我々は經に頼つて佛を聞き、像に依つて眞に接することが出来るのであります。表顯なければ無相の佛もなく我々の心を致すことも出来ないであります。」

武帝云ふ。「真佛は無相虚空の如きことは誰も知つて居るのであるから、別に經像を借りる必要がないではないか。」

慧遠云ふ。「然らば後漢の明帝以前、この國のものは、何故に真佛無相の理を知らないのでしょうか。」武帝はこの間に對しては答へることが出来なんだ。

慧遠云ふ。「經典に依らずして自ら道を知ることが出来るならば、三皇の以前、文字のない時代に、何故にこの國の人々は母を知つて父を知らざる禽獸の様なものであつたでせうか。」これにも武帝の對へはなかつた。

慧遠は更に云ふ。「若し佛像が木や金で作られて無情のもの故に之を拜しても福がないから廢するといふならば、國家に祭事をする七廟を何故に最初に廢せられないのでありますか。」武帝はこの問にも正面から對へないで「佛教は外國の法で茲に必要なものであるから廢しようとするのである、七廟も亦續いて廢せようと思ふ」と逃げた。

慧遠曰く、「若し外國の法であるから廢するといふならば、孔子の教は魯の國の法であるから、秦や晋の地では廢せねばならぬことになる。又七廟を廢するといふ陛下の仰せは、先祖を尊ばないといふ事になり、敬を失ひ儒の教ゆる所に戻り陛下の前に儒教を残すと曰はれた所と矛盾を來すこととなる。かくして儒佛道三

教を廢して、陛下は何の理想を以て國家を治めようとなされるのでありますか。」
 「魯は秦晋と離れてゐても、一人の王者の治むる所で、佛教のそれと比してはならない。」

「若し秦と魯とが一人の王者に統御せられるといふ理由で教を一つにしても善いと云ふならば、支那と印度と遠く隔つてゐても、同じく閻浮州と稱する中に屬し、轉々王の治める洲になつてゐます。此處にも佛教を廢する理由を見出すことが出来ません。」武帝は更に辭窮して答へる所がなかつた。

慧遠云ふ。「詔の如くんば 僧尼を還俗せしめ家に還して孝行せしむといふのでありますが、儒の道にも既に身を立てて父母の名を顯はすを孝と讃へて、必ずしも家に還るを孝とはしてありません。もし陛下が父母を離るゝことを不孝と曰はれるならば、陛下の左右には兩親あり乍ら陛下に召されて事へることの出来ないものが澤山あります。陛下は番に依つて歸家を許すと曰はれても、長役は五年父

母を省みることが出来ない不孝を陛下がこしらへてゐられます。沙門は家を捨てても冬夏はそれ〴〵縁に依つて道を修め、春秋には家に歸つて父母に侍することを許してあります。何を以て沙門に不孝の罪を強ゆることが出来るのでありませうか。陛下の廢佛の理由は一も徹底するものがないではありませんか。」

慧遠の嚴しい舌端に、流石の武帝も窮地追ひ込まれて返す語がなかつた。すると慧遠は更に追撃に移つて、帝の頭上に大爆彈を投じた。

「陛下は今王者の力の自在を恃んで、三寶を破滅しようとしてられる。かくの如きは邪見の業である。無間地獄は貴賤を問はない。陛下は何故に之を怖れ給はないのであるか。」

これを聞くと武帝は勃然と怒り、色を變へて慧遠を睨んで叫んだ。

「朕は百姓の安樂を希ふのみである。汝の云ふ地獄の苦しみといふは朕の辭するところではない。」

慧遠は少しもひるまず、更に進んで帝を抑へて留めを刺した。

「陛下は今邪法を以て人々を導かんとして、現に苦の因を植ゑて居られるのであるから、邪法を受けた百姓も陛下と共に無間地獄に墮在するものであります。何處に百姓の樂しむべき所がありませんや」。

慧遠の意氣正に颯爽、流石の武帝も答ふる所を知らず、「今日は皆が還るが宜しい、又集まつて貰ふであらうから」と退散を命じた丈けであつた。武帝の前を退いてから、五百の僧侶は皆感泣した。殊に上統の衍法師は慧遠の手を取つて、「天子の威は龍火の如く、觸るゝものを皆焼き、犯し難いものであるのに、貴僧は、よく之を窮め給うた。實に貴僧は護法菩薩である」と感激の涙をしぼつた。

しかし武帝はその廢佛を押しひろめて行つた。寺塔は破壊され、財物は宮に沒收され、多數の比丘は還俗を迫られた。曇遷等の三百餘人はその強迫と戦つて還俗を肯んせず、南の方建業に逃れた。宜州の沙門道積は宮廷に進んで、強諫した

けれども容れられないので、同志七人と、大法の難を見るに堪へずと云ふので、彌勒像の前に七日の禮懺を勤修して、餓死した。靜謐も上表して引見を請ひ、殿に上り、手を舉げて云ふやう、「今日の來意は三寶の慈恩を報ずると、檀越の厚い恩義に酬いる二つであります。」辭を盡して旦より午に至つて廢佛の無謀無理を諫めたが、帝の意志は已に決して、動く處がなかつた。仕方がなく靜謐は佛道二教の正邪は言を以て辯ずるも、陛下の耳に入らずとすれば、どうか油鑊を殿庭に置いて、二教のものを煮て、死なゝい方を正しいとして下さいと願つたが、これも容れられず、遂に門人三十餘人を卒ゐて終南山に隠れた。後、惡魔の手が益々延びて寺塔が破され、大法が殆んど亡び終らんとするを慨いて、大小乗の經典を繙き三寶集二十卷を作り、岩洞に藏して後代の再興に備へ、號泣七日、刀を取つて肉を條切り、腸を引き出して、松の枝に掛け、心臟を抜き出し、手に捧げて、壯烈な死を遂げた。不思議なことには赤い血は一滴も流れず、白い乳が石の上に凝

つてゐたと傳へられてゐる。

武帝はその年(西紀五七八年)、熱病をわづらひ、身に大變な瘡を生じて、もがき死をした。宣帝位に即いて直に復教の詔書を出し、有髪の僧を許し、之を菩薩僧と名け、三寶を尊重し、後、隋唐の佛教興隆の素地を作つた。

佛教は隋に至つて再び隆盛を極めた。諸國の佛寺は復興せられ、僧尼の數を増し、英僧輩出して、佛教文化の華を開いた。然し盛の裏には常に衰頹が秘んでゐる。その衰頹を喰ひ留めるものは死を顧みないものゝ力でなければならぬ。大蒙五年(西紀六〇九年)に至り、天下の無徳の僧侶を淘汰し、寺院數も僧侶の數に應じ、其の他は廢棄する勅命が出た。天台大師智顛の門人、大志は或は又ぞろ法難を生じはせまいか。佛法の破滅が來りはせまいかと案じて、蠟衣を纏うて佛前に慟哭し、三日三夜、參籠し、自分の身を捨て、正道を明かにせんと誓ひを立て、

都に上つて表を奉つた。「願くば陛下、三寶を興隆し給へ、貧道當に臂を燃し以て國恩に報せん。」帝これを許して爲に大齋を設けしめた。大志は大勢の人々の集まつた處で、三日食を取らず、大きな棚の上の上つて鐵を焼いて臂を焼き、刀を取つて骨を碎き、布に蠟を包んで、臂に滴らしめ、之を燃やした。光が巖や岫を照して壯烈と曰はうか殘忍と曰はうか。見てゐる人達は、痛みが心髓を貫いて、わなわな震うて居る許りであつた。大志は辭色少しも變らず、佛徳讚嘆の偈を歌ひ法話をなし、臂が燃え盡きて棚を下り、定に入つて坐禪したまゝ入寂した。大志のこの壯舉に依つて、詔は下つた儘、行はれないことになり、この瀬を乗り越すことが出來た。

六、その後の法難

支那には前後四回の法難があつた。第一回は北魏の武帝の大平眞君七年(西紀

四四六年)、第二回は北周の武帝の建德三年から七年(西紀五七四—五七八年)、第三回は唐の武宗會昌五年(西紀八四五年)、第四回は後周の世宗の顯德二年(西紀九五五年)である。

第一回の北魏の法難は、支那文明の轉回期に於ける、新舊兩派の、激甚な衝突であり、北周の法難は、傑物であつた武帝が、王家の統一、思想の歸一を理想として行つたものであり、迫害者の方にも理想があり、光があり、迫害せられる方にも充分な弾力があつて、抗爭年を累ね、遂にはね返して再び佛日の光を彌増しに輝したが、後二回の法難は、佛教者の側も英氣衰へて抗爭の力なく、迫害者の方も何らの理想なく、たゞ貧弱な道教的な現實主義から來た憎惡の感に支配せられた許りであつた。されば茲には後の二回の法難を略叙して、筆を急がせて、日本の尊き事蹟に行かねばならぬ。

武帝は幼時から奢侈放逸で、移り氣な機嫌の變り易い暗愚な性質であつた。二

十八歳位に即くや直に道士趙歸眞を愛用し、侍臣に王業の始め過信せられてはいけないと諫められても納れず、諫言を呈するものは悉く之を退けて、道士に依つて仙を求め、不老長生を希ふのみであつた。趙歸眞はその寵に慣れて、佛教を讒し、廢佛をすゝめ、會昌三年、麟德殿に於て法論を闘はすこととなつた。知玄法師壇に登つて、論議の辯を開くに、精緻の論鋒に光彩あつて、道士のこれに向うて語を闘はすものがない。依つて知玄は堂々乎として帝王の道を述べ、羽化登仙の如きは山林匹夫の學ぶところにして王者たるものゝ心を留むべきものではないと斷じたが、武帝は怒つて、野に放逐し、耳に入れず、僧玄暢は歷代帝王錄、三寶五運圖を著はし奏上して諫めたが、聞かれず、益々佛教嫌ひの鋒鉞を顯はし來つた。趙歸眞は鄧元超、劉元清等を皇帝に勧め、宰相の李德裕と共に武帝に焼き付けて、遂に會昌五年(西紀八四五年)、詔を下し、佛寺四千六百處をこぼち、僧尼二十六萬五百人を還俗せしめ、佛像の銅は錢を鑄、鐵は農具を作らしむるに至

つた。然し翌年、武帝は疽を背に生じて道教の金丹薬もその効なく不老長生どころか三十三歳にして、狂死したので、宣宗即位して、李徳裕は流鼠せられ、趙歸眞、鄭元超、劉元清は首を刎ねられてこの廢佛も一段落を告ぐるこゝとなつた。

唐の代が終つて五代となり、後周の世宗の時、第四回目の法難が起つた。顯徳二年(西紀九五五年)、私に僧尼に得度を授くることを禁じ、勅額なき寺は悉く廢棄し、廢寺の數三千三百三十六所に及び、其の廢寺の佛像を以て錢を鑄た。世宗の云ふ所は、佛は善き道を以て人を化益するものゝ事であるから、苟も善に至れば皆佛を信奉するのである。銅像を佛と稱することは出来ない。且つ佛は人を利する爲めに頭を與へ眼を施したものであれば、今自ら身體を錢にしても惜む所ではなからうと云ふにあつた。愚王の愚言である。然しこの廢佛は割合に軽く、前三者と比べて深くなかつたのであるが、これは道丕の力に依ると曰はれて居る。

この佛像を破毀する時、鎮州の大悲觀世音が靈驗佛であると云ふので、誰れも

近づくものがない。武帝之を聞いて、自らその寺に行いて、斧を以て觀音像の胸を割つた。觀て居る人々が戰慄を禁ずる能はざる所であつた。果して顯徳六年、北征の時、疽を胸に發して、狂ひ死をして仕舞つた。

悲しい哉、我々はこの後の二回の法難に於て、その悽慘の壯を察することは出来るけれども、身を以て法城を守り、後代の佛法をして血を湧かさしむる様な人の名を聞かない。従つて、法難後、佛教の盛り返して來る力も弱かつたことは致し方がない。

五、日本佛教の精神

一、吉水の法難

日本には特別に法難とも云ふべきものはない。時の朝廷が、自分の意志からして佛教破却をせられたことはない。欽明帝の朝に佛教渡來して、茲に新舊文化の衝突から恐ろしい渦を生じたが、聖徳太子の勝れた御手腕に依りて無事にこの渦を乗り切り、燦爛たる佛教文化の花を開いてから以後、朝廷は常に佛教の外護者として、又その指し示す理想の實行者として、全然佛教を取り入れられたので、印度や支那に見る法難はなかつたのである。若し茲に強いて法難として擧ぐるならば、一、南都や叡山の佛教者側の嫉視から加へられた吉水の法難、及びその引きつゞきとして、叡山側が念佛門に加へた迫害。二、上行菩薩の自覺から生じた

日蓮上人の熱狂的な法華經宣傳に依つて招いた、日蓮宗一派の受けた迫害。三、織田信長が、その政略上より天台宗、一向宗、日蓮宗に加へた壓迫。四、徳川時代鹿兒島に於ける島津家の念佛門禁止。五、明治御維新に際し、政府當局者が、皇室中心思想の誤れる政策から、一般佛教に加へた壓迫を數へ得ると思ふ。この中第二の日蓮宗迫害史従つて其の殉教史は、雑誌『毒鼓』の特別號殉教號に委曲を盡してあるから今これを除き、第三の信長の迫害も、世に遍ねく知られて居ること故に省略し、吉水の法難と、鹿兒島の殉教と、明治に入つて、三州菊間藩事件に關して述べて行かうと思ふ。

平安朝の末期、藤原の世も末となれば、見るごとくこと悉くうたてきことのみ多くて、澆季末法のおもひ、人々の胸に重く、憐る平氏の榮華、露のひぬ間のさかひと消ゆれば、實に恐しきはこの世にありけれど、一念三千の觀法、諸法實相のおもひは高きも、機教の何となく不相應におぼゆるかなしみに、天下は擧げて

惱みを感じてゐたのであつた。

「往生極樂の教行は、濁世末代の目足なり、道俗貴賤誰か歸せざらん者ぞ、但し顯密の教法其の文一に非ず、事理の業因惟れ多し、利智精進の人は未だ難しとせず、余が如き頑魯の者豈敢てせんや。」源信和尚のこゝろは法然上人の胸に同じい波を傳へて、上人は念佛こそ我が助かる道ぞ、十惡の法然房、愚痴無痴のなげきの身ながらに救はるゝ出世の要道ぞと、いのちの道に入り給うた。おしへはあまたあれ、みちはいく筋もあれ、胸に罪の痛手を受けて、現實のなやみの重荷を負へるものに何としようぞ、生きるといふことがつらい事の上に、迷を離れねばならない。生きるが一杯の上に求むる心を満さねばならない。上人は一向專念彌陀名號、哀々たる慈念を垂れ給ふ大悲の本願に乗じて、その御名を稱へることそれがわれ人に恵まれた道だと知り給うた。上人は黒谷を出て吉水に住居を定め、念佛の一行をすゝめ給うた。この法は實に難破の船に救ひの綱であつた。吉水の

草庵には天台の座主も道を求め、高野の僧都も法を聴き、高位の官人も聽法の座に列なり、盜人の耳四郎も渴仰の頭をうなだれた。念佛は天下を風靡して、なやめる魂は初めて救ひの道を見た。安堵の思ひが民衆に與へられた。

然し乍ら、道は多くの場合逆縁に依つて弘まるものである。この温和な靜かな念佛の教團に、迫害が來た。當時の教權派叡山奈良の僧徒は、この教團を嫉視の的として尊き佛法を破毀するもの、諸宗を誹謗するものだとして、元久元年、朝廷にその念佛停止を逼つた。同じく三年も續いて再訴した。時も時、折りも折り住蓮安樂の二僧が唱導して、鹿ヶ谷に念佛の勤行があつた。二僧は聲明道の先達、その念佛の聲は哀婉雅亮、東山の翠色に籠つて、人の心をそそり、院のらうたき女籠、松虫、鈴虫を動かして、恣に出家せしめたので、事件は急轉直下、念佛停止の勅命となり、四人の僧は死罪、法然上人以下師弟八人は別々に遠流となり、吉水の道場は閉鎖となつた。

……浄土の教意、この時に當りて滅亡しなんとす。これを見、これを聞きて、いかでか堪へ、いかでか忍ばん、三尺の秋の霜肝をさき、一寸の赤熾むねをこがす。天に仰ぎて嗚咽し、地を叩きて愁悶す。何に況んや、上人、小僧におきて出家の戒師たり、念佛の先達たり、罪なくして濫刑を招き、つとめありて重刑に處せば法の爲め身命を惜む可からず、小僧かはりて罪を受くべし。もつて師範の罪をつぐのはんと思ふ。もつて浄土の教を守らんと思ふのみ。死罪、死罪、敬白

これ實に九條關白兼實公の血を吐く思ひの誓文であつた。然し乍ら一度燃え出した信の火はかくの如き官権の手で消されるものであらうか。

承元元年三月十六日、法然上人が配處土佐へと赴かれたのは老齡七十五歳の御時であつた。「驛路はこれ聖者の行く處なり。謫處はまた權化の住む砌みきりなり。況んや末世の愚惑ぐしゆんをや、先蹤せんしゆうみゝにあり、耻とするに足らず愁とするに及ばず。」上人

は謫處の月を眺むるを悲しみとせられなんだ。「流刑さらにうらみとすべからず、邊鄙におもむきて、田夫野人をすゝめんこと、すこぶる朝恩ともいふべし。」法難は實際にその法を亡ぼす道ではない。難に遇ふものは四方に分れて却つてその道を廣く弘めるのみである。「この法の弘通は人はとゞめんとすとも、法さらにとゞまるべからず。」大法は水の地をくゞつて流れる如く、人の胸から胸に傳はる。權力に依つてとゞめることの出来るものではない。法然上人のこの凜乎たる態度はその信の火の力のなさしむるものであつた。

親鸞上人は越後に流された。「大師上人もし流刑に處せられ給はずば、我れまた配處におもむかんや、我れ配處におもむかすばいかでか邊鄙の群類を化せん。これなほ師教の恩致なり。」聖人の迫害に對する態度はこれであつた。徹觀すれば、信誘共に救ふ大慈悲だ、順逆兩縁共に大悲のおはからひでなければならぬ。

この信念の燃え盛つてゐる内はいかなる迫害の水を掛けても消えるものではない

益々火の手を擧げるのみだ。安貞元年には隆寛、空阿、幸西が流される。しかし依然として、京洛の地には念佛の會合が催され、諸師の流罪の地には南無阿彌陀佛の聲が盛んに興つた。かうして都會の文化が追々に田舎に、貴族の勢力がだんだん民衆の手に移つて行つた様に、宗教も次第に民衆のものとなり、日本民族の底に南無阿彌陀佛の宗教の根が張ることとなつた。

二、薩摩の法難

封建の世とは云ひ、廣くもあらぬ日本の國の中で、何百年間薩摩藩に限りて、一向宗の禁止、本尊を拜み、念佛を稱へたものは、苔刑、遠島、斬罪に處せられたといふ事は、今日から見れば不思議の様に思はれる。當時の絶對の権力者である藩公が、かくの如き恐ろしい劔の力を以て取りしまつても、濱の雄波の寄せかけ／＼來るが如く、念佛の聲を斷たず、秘かに信念の火を點して、明治聖代の

曉まで持ち堪へて來たのも亦不思議と曰はねばならない。

島津藩が何故、念佛門の禁止をしたかは、今日まで、未だ明白に知られてゐない。一般に信せられてゐる處では、秀吉が薩摩征伐の時、顯如上人を頼んで臣下の糟屋内膳正等を家老、若黨などに仕立て、薩摩に下向して、十分に國狀を探らしめ、且つ門徒のものに道案内をせしめたので勝利を得た事が解つて、以後國禁となつたといふのである。

一向宗之事先祖以來御禁制之儀ニ候條、彼宗體ニ成候者ハ曲事タルベキ事

慶長二年二月二十三日

義弘御判

この先祖以來といふ意味ははつきりしないけれども、兎に角慶長二年この國禁の觸れがあつてから、明治九年、

第七十九號

各區々戸長

各宗旨の儀自今人民各自の信仰に任せ候條此段布達候事

明治九年九月五日

鹿兒島縣參事 田 畑 常 秋

の達示所謂お開ひらきがあつた時まで、丁度二百八十年間、薩摩、大隅、日向三州の民は、その信仰の自由を奪はれて、苦にがい血涙の日送りをしてゐたのであつた。

藩では宗門改めの役人を置いて厳しく僉議し、時々恐ろしい觸れを出して、念佛の根絶しをしようとする。信者の方では隠れ／＼て法を唱へ、本尊を拜して念佛の流れを相續する。本尊を御守して、教役に従ふものを番役と唱へ、番役に選ばれたものは、表面、商賈をするか農業をしてゐて、意では仲間のものゝ信仰の火を續けしむる。それも至極秘密に洞穴の中か土藏の二階に五人乃至十人の小人数を集め村の小供を張番させて、教を説くのであつた。若しこれが役人の目に入れば、所謂法難崩れとなつて、流罪死罪の恐ろしい悲劇が起つて來るのである。

寶歷年間、相良領さくらの人吉ひとよしに山田の傳助と呼ぶるゝ信心者があつた。佛教講の講

主をしてその地の法義を護つてゐた。その地に富左衛門といふ賭博者があつた。錢が欲しさにその講に交はり、傳助に「御禮に御本山參りがしたいと思ふが錢がないので」と云ひ出した。欺かれるとは知らずに喜んだ傳助、「錢などは私が心配してやるから、それでは一緒に參らう」と錢を借してやつた。人吉を離れて會はうといふ約束の場所で富左衛門は居ない。「先へ行つたかも知れないから、旅の中には遇はれよう」と氣にも掛けないで、本山の御參りを済して國へ歸ると召し取られた。富左衛門が傳助の歸國で舊惡の知れることを恐れて訴人したのであつた。かういふ明かな證人があつて見れば逃れることは出來ない。斬首の刑と定まつた。愈々處刑といふ時に、役人が「何かいまはのきわに望みがあれば遂げさせてやらう」といふ親切な語に打ち喜び、勤行がしたいと申し出た。許されると聲高らかに勤めして、念佛を稱へ、——「球摩郡で天下晴れて念佛を稱へたは私一人ぢや」と悦びにひたつて及にかゝつた。これは寶歷十一年十一月十九日であつた。

天保六年、飯島コシキマに悪魔の手が下つた。疑はしい者は引つ捕へて拷問にかけ、土藏穴倉、椽の下、洞岬草鴉木の洞までも探つて本尊聖經の有無を取り調べた。果てはあらゆる民家に火を放つて、有るも無いも委細構はず焼き拂つて念佛の種を根絶せしめようとした。

阿鼻叫喚のさけび、火の海の炎の中にも役人は若しや聖經本尊を持ち出すものはないかと睨んでゐた。すると一老婆が、焰の中から狂亂のすがたで山の方へと逃げようとするを見つけた。役人はすはとてその後を逐うた。逐ひついて見れば老婆は手に汚ない腰巻をかゝへてゐる。「婆々お前への手のものは何だ。」と曰はれて初めて氣がついた様に、腰巻を眺めて、「まあ、私としたことが、餘り狼狽へて、こんなものを持ち出して……」と耻ぢ入る様に笑ひに紛らした。「そんなものは捨てゝ仕舞へ」と役人も一緒に笑うてその場を去つた。されど、そんなものが捨てられるものであらうか。包みこそ穢ない腰巻なれども、中身は生命よりも

大切な本尊であつた。老婆は天上裏にかくまひ申した本尊をすは法難崩れぢや、火事ぢやと聞いて持ち出し、山の隠し場處に運ぶ途中にて見付けられて、「仕舞つた」と思ふ突差とさに、「けがらはしけれどしばし御辛抱あそばせ」と自分の腰巻にぐる／＼巻いて、御助け申上げたのであつた。

上之山御座の番役、太次郎は足輕の手に捕へられて白洲へ引き立てられた。拷問はどんなに厳しくとも信念の太次郎の唇を解くには猶優しかつた。然し遂に上之山御座の御本尊が探し出されて眼の前に突きつけられ、「最早、かういふものが出た以上仕方があるまい、まあいつもの通りこの前で給仕でもして見せよ」とからかはれた。よろしう御座るときちちんと御本尊を並べ、道具をそろへ、肩衣かけて勤行をした。吁、信念あるものの試鍊の庭よ、晴れの舞臺よ、何といふ莊嚴な光景であらうぞ。不思議にも太次郎は許されて後五三次と名を變へた。五三次の子は五次郎で十六歳から番役をつとめた。その三十七歳の時に、文久三年の法難

崩れに召し捕へられ、七日の間の拷問に忍んで自白せなんだ。後に太右衛門と改名して明治三十三年迄生存した。改名は戸籍上の死亡者たることを示すものである。

五百石の祿取り青木清助の妻、お牧は臨終の床に、「母が臨終を覺悟してのこの形見を大切に」と、御文を十歳の千代女に與へた。「千代、私の死んだ後は、何事も叔父上に」と遺言を残した。叔父とは岡部市之進と云ふ侍であつた。市之進は妻を迎へる時に月に兩度づゝ親里へ歸らして下さることと云ふ條件で某の娘を貰うた。妻は許された條件の下に月に八日と二十八日の二度づゝは必ず外出して、刻限違はず歸つて來た。或る時、不圖不審が市之進の胸に起つた。十二月二十八日の夜、ひそかにあとをつけて、妻が實家に歸るのではなくて、山の中の同行の集まりに行くことを見届けた。不届至極と、家に歸るを待つて不惑ながら手討と刀を抜けば、命はもとより覺悟の上、さり乍らどうぞ暫らく、今生の御暇乞に御佛

におつとめがしたいと壁の中に隠して置いた御佛を出し奉り、靜かに勤行して、潔よく首の座に直るを見て、市之進、「わしもこれまで隠して置いたが心底見届けた上は明かさう」と、學問所の柱のうちに敬ひ奉つた五寸の御本尊を出して、同信のよしを語つて法義の相續をした。

この母の子でこの叔父が後見人、千代はいつしか、生死の大事に身が入つた。母戀しとして形見の御文を繙き、幼な心に涼しい念佛の聲を絶たなんだ。父は五ヶ年の江戸詰、千代は幼ない妹を抱へてさびしい、それでも念佛に賑はしい留守居をしてゐた。

それから幾年か過ぎた。或る年のこと、藩の吟味所に、青木清助長女千代以下四人國禁を破つて京都本願寺へ參詣の大罪の調べがあつた。白い砂の上に若い美しい千代は撫子の花の様に可憐に坐つてゐた。

「不届のもの共、御國の御法度も顧みず、一向宗に歸依して京都まで參詣いた

せしその頭助有體に申し上げよ。」

「頭助はこの千代に御座りまする。母戀しさに後生の大事が掛り、御法度も顧みずこの度の參詣、一言も申譯御座りませぬ。」

役人は何とかして可憐な千代女を救はんとした。京都參詣ではあるまい。伊勢參宮であらうとも尋ねた。これから心底を改めて一向宗を離れるであらうとも聞いた。然し千代女は覺悟の思ひに潔よく、一念歸命の信仰を讃へて、往生淨土の我身の上を喜ぶ許りであつた。止むなく、可憐の花は、其の夕、無慘に魔の手に殺された。

安政六年、薩摩郡高城郷に法難崩れが起つた。塚村貞助始め四十幾人が召し捕られて白狀を迫られたが、いかなる拷問にも知らぬ存せすの一點張りで通した。四十幾人のものは皆絞殺された。

寺園傳藏は、安政三年、二十五歳の二月、番役を父より請け継ぎ、翌年の法難

崩れに囚はれて拷問に掛けられ、とう／＼それを忍び通した。一生に十八度召し捕られて命がけの苦勞をし、明治九年の夜明けに遇うて初めて樂に念佛を稱へられる身の上となり、大正四年に、「私は重荷を澤山持つてゐたが皆先きへ送つて、今はこの身が參らしていたゞく許りになりました」と喜び／＼往生した。

三、菊間藩事件

明治御維新は眞の意味に於て日本の更新であつた。日本民族としての一大覺醒であつた。飛躍せんとする獅子のめざめであつた。眼ざめると共に遅れた三百年の文明を取り入れて、惰眠の「時」を取り戻さねばならなかつた。それであるから何でも新らしいものは何の僉議もなしに取り入れられた。何事も巧利的に考へられた。尊いものでも美しいものでも、それが古くさへあれば、又それが實利に用ゆることが出来なければ古靴の様に棄てられた。松島の島さへ切られようとした

時代であつた。只其の宗教政策は佛教が古いから棄てようといふ許りではなく、皇室の擁護といふことからして、最も古い神社が引つ張り出されて、思想の統一、宗教の統一に使はれた。

明治元年二月、神祇事務局を置き、

三月、神社の佛像を神體とし、佛具を社前に置くを禁じ、

明治二年七月、神祇官を太政官の上に置き、政府の神道主義が露骨に表明された。

そのため、政府では廢佛ではないといふけれども、地方では自然にその意志が顯はれて廢佛毀釋の運動となつた。明治三年十月、讃岐多度津の藩主廢佛を行はんとして領内が亂れ、同月、越中富山の藩主、領内の寺院を廢して一宗一寺とした。信州の松本藩、美濃の苗木藩等、それ〴〵佛教に迫害を加へた。三河の菊間藩に於ても、嚴しい毀釋を斷行せんとしたが、茲では、東本願寺の護法場に於て

鍊え上げられた石川台嶺其の他の人々の殉教の血に依つてその企も流れ去られて大事に至らなかつた。護法場とは、時世の日に非なるを見て、「佛法の滅亡今かと存じ候」と悲憤やる方なかつた、伏見の闡彰院空覺の開く處で、今迄の學問に外學を加へた研究所であつた。

三河の碧海幡豆の兩郡は大濱に陣屋を構ふる沼津の城主水野出羽守の所領であつた。明治維新に菊間藩大濱出張所と改められ、服部小賛事がその長として改革を行ふことゝなつた。

小賛事は赴任以來新政を布き、敬老會を開いて老人をいたはり、新民序塾を開いて教育を初め、頼母子講様のものを興して經濟貯蓄を教へ、銳意改善に務めたが、其の宗教政策は、必竟民意を知らざるものゝ、只上官の意を向ふる所作であつた。

元來三河殊に碧海幡豆の兩郡は古から眞宗の繁昌した土地である。この土地に

無謀な宗教の干渉を始めたのである。

先づ、僧侶取調係を置いて、各村を巡回せしめ、敬神愛國を説き、孔孟の教を示し、神前には念佛申すものではない。のりとを讀めと祝祠の辭を教へ、毎日天拜日拜するものちやと祈禱を強いた。民衆は信仰の押賣に閉口して、耶蘇に引き入れるのだ、切支丹が來たと、人心兢々たるものがあつた。

明治四年二月十五日、小賛事は領内すべての寺院を呼び出して、左の下問書に請書を出せと強要した。

- 一、無檀無祿の寺院は年限の新古を問はず合併すべき事。
- 一、合併せしむるに付いては住僧並に留守居の僧尼は本寺引取るべきこと。
- 一、本寺に差し置き難き僧尼は本寺申立次第生國へ可送届事。
- 一、一向宗の寺院合併の節、家族の進退は本寺の關係、或はその村の關係の事。
- 一、還俗歸農願出の向は本寺申立の次第、人物に依りては可聞届事。

この時、眞宗の僧侶は日延べを強請したが、小賛事以下の役人は席を蹴つて退いた。依つて據處なく西方寺と光輪寺を通じて日延を願うたが、役人はその強請を叱咤するのみで退いて仕舞うた。

信仰の押賣と廢寺合寺の形式に顯はれた廢佛。他藩、西尾藩、重原藩、刈谷藩岡崎藩など皆この菊間藩の成績を見て、續いて實行しようとしてゐることが傳へられた。吁、護法！、この危機に際して、一身を碎くが如き事は專修坊法澤や、蓮泉寺台嶺には何でもないことに思はれた。一味の人々は暮戸の會所に集つて、強訴して法を護る決心をして隨喜名簿を作つた。その夜は徹夜、曉に靜かに勤行して今生の御暇乞をなし、暮戸を出發して大濱に向うた。途すがらの村々の人々は僧侶方丈をやらぬと後から後からとついて來て、鷺塚に着く時分には行列一里餘にも及んだ。

大濱の出張所では、この事を知つて大變出來と、杉山小屬が四五名の隨員をつ

れて、鷲塚に出張し、こゝにて談判となつた。

天拜日拜、神前祝詞等宗規に違ひ候儀、御差止被下度、寺院合併以下の間の儀御流れに相成り候様致度、宗判の儀在來の通、被成下度、右件々斷然御採用相成候はゞ速に引取可申旨、

これが強訴であつたが、役人はならぬの一點張り、九日の日も暮れた。露天で結果を待つてゐる群集は談判手緩しと、騒ぎ出した。其の中、僧侶側は遂に退席の止むなきに至つて、座を引いたので、つい群衆は暴徒と化して、役人の一人を殺した。暴徒は竹鎗を手にして大濱に迫つたが、陣屋の大砲で、散り／＼になつた。

台嶺、法澤以下の僧、信者の人達は皆縛についた。受刑は元より覺悟の前だ。誠に静かな受刑者だ。服部小賛事は、

一、朝日を拜する事は固より無之事。

一、神前の呪文は祝詞の文なり。此儀宗旨に背く儀ならば相止め可申事。

一、寺院廢合之事致し申間敷事。

といふ覺書を出して、全部の主張を撤回した。

台嶺、法澤以下潔よく罪に伏して、台嶺は死刑に、法澤は准流十年に、その他それ／＼の刑を受けた。役人を殺した罪を城ヶ入村シヤウイリの力士榊原喜與七が一人で引き受けて死刑に極つた。台嶺は獄屋に於て左の覺書を同囚の人々に送つた。

北囚臺嶺、南囚諸士中へ遺候條々

一、朝暮の勤行は時尅を定め慇懃に可相勤事。

但高聲は遠慮致し神妙に勤行可有之事。

二、勤行食事の間は先づ念佛及び聖教拜讀、其他は其性の近きに順ひ、詩歌何なりとも御出精可有之候事。

但念佛なりとも高聲は是亦可爲遠慮事。

佛國土の建設者

- 一、戲笑雜話不行跡は是亦可爲謹慎候事。
- 一、詩歌共に口吟候事は急度御止め可被成候事。
- 一、朝暮の起臥は勿論、總て同囚の者、進退禮儀嚴肅に御守り被成度和而不同同而不和の遺教、御忘有之間敷事。

右之條々大略を述候其の餘は護法心に具候也。

妻へ當てゝ左の手紙が十二月二十七日に送られた。

一筆申入まいらせ候、寒氣きびしく候ところ、御兩親はじめ子供まで御無事に候哉……、扱てこの文(別紙の法話)は霜月二十八日の御命日にふと思ひつき、心に浮ぶに任せ、御法儀のあらましかきしるし候。……母様とふたりにて度々御よみ被成、せい人いたし候はゞ、子供にも御よみきかせ被下、御法儀によるこび被成度候。我が身の成り行きはいかやうに相成り候もはかり難く、此文をかたみと思召被下度候よふ、母さまへも御申あげ被下度候か

しく

霜月二十八日

露の身はこゝかしこにきゆるとも

心はおなじ西のかのきし

幸 相

おとししどの

(法話略)

台嶺は十二月二十九日の夕ぐれ、西尾の町にて刑場の露と消えた。法澤以下五人の人は牢死を遂げた。榊原喜與七は、未決に居る中に、幸ひ台嶺の牢の隣に居たので、細々と法話を聞いて金剛の信を喜んでゐた。絞罪の申渡しがあつた時一向平氣であつた、役人は多分無學の爲めに刑の事が解らなかつたのだらうと思つてゐた。西端^{ニシバタ}にて刑の執行の時にも平常と變りがなく、見物の人々に丁寧な禮を述べ暇乞して處刑を受けた。

殉 教 者

かうして、幾つかの尊い魂は、この世を去つた。然しその成し得た處は偉大なものであつた。廢佛の大勢を喰ひ留めて、明治の佛教に更新を與へる力となつた。大正九年の八月の中旬、岡崎の三河別院に於て、これらの人々の五十年忌がつとめられ、その遺品の展覽會が開かれた。台嶺の血で染められた白衣や襦袢も陳列してあつた。一日、四十歳程の一人の婦人がこの血染の衣物の前に立つて、「陳列の品に觸つてはならぬ」といふ注意書にも構はず、涙に咽びつゝ、幾度も、その白衣を撫でゝはその手を以て、自分の胸を撫でゝゐた。吁、その婦人の心！、その心が今我等の心であつて、興隆佛法の力はこの心の外に何處に求むべきであらうか。——(竟)——

佛國土の建設者 畢

大正十一年十月二十六日印刷
 大正十一年十月二十五日發行
 大正十一年十月三十日三版

佛國土の建設者
 定價金貳圓八拾錢



發行所
 發賣所

名古屋市中區南武平町三番
 振替名古屋二九〇九番
 名古屋 文光堂
 東京 光融館
 京都 法藏館
 大阪 柳原書店
 久留米 金文堂

印刷所 株式會社一誠社

名古屋市中區千早町五丁目十六番地

印刷者 山田良弼

名古屋市中區千早町五丁目十六番地

編輯兼發行者 佛教協會

名古屋市中區南武平町三丁目五番地

代表者 木津無庵

505
54

終